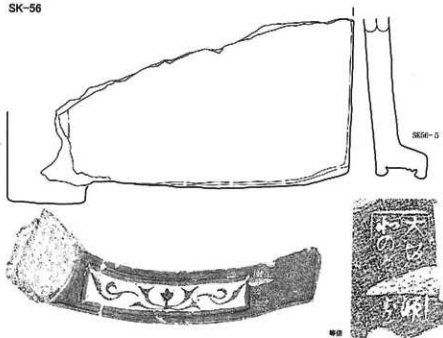


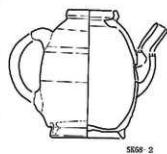
SK-56



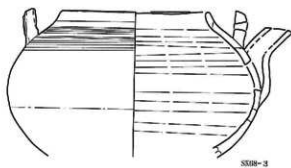
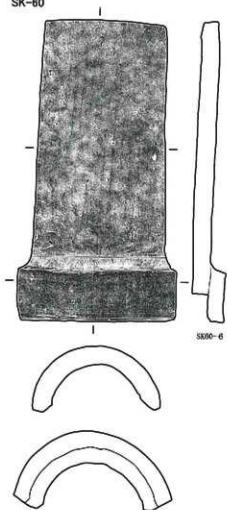
SK-67



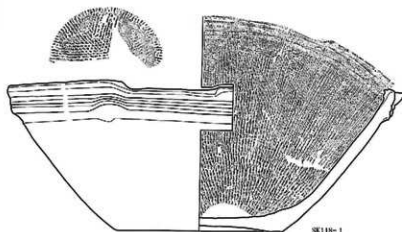
SK-68



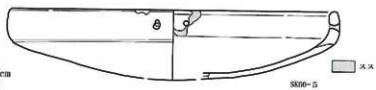
SK-60



SK-118

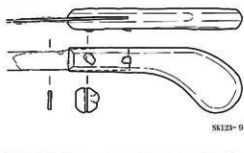


0 (1:3) 10cm 0 SK60-6 (1:4) 10cm



第20図 遺物実測図(3) SK-56・60・67・68・118

SK-123



SK123-0

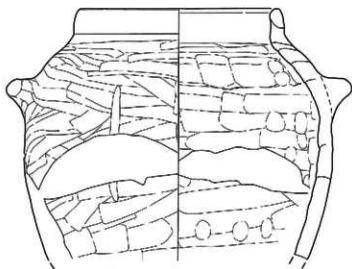
SD-10①



SD10-65



SD10-72



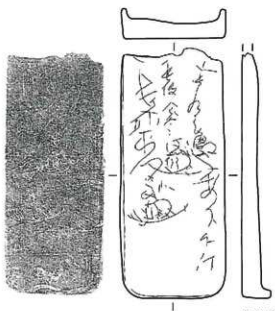
SD10-83



SD10-76



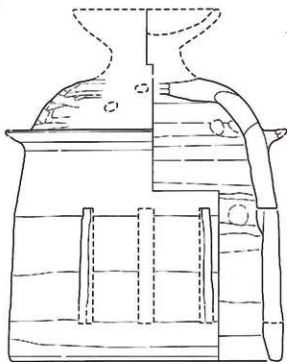
SD10-79



SD10-109

0 SD10-109 (1:2) 5cm

0 (1:3) 10cm



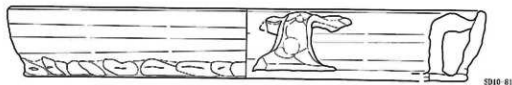
SD10-85

第 21 図 遺物実測図 (4) SK-123 / SD-10①

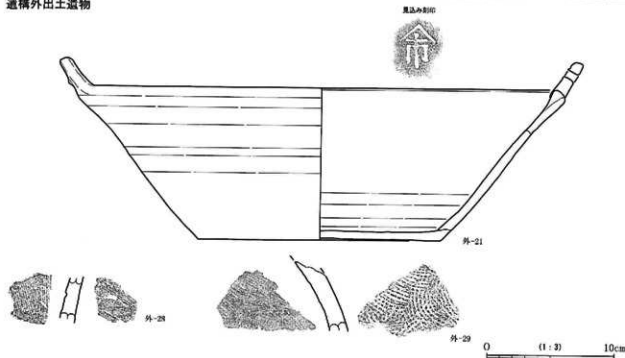
(V-9. 出土遺物 29頁→) 円筒形素焼き内瓶を入れ、前者には重クロム酸カリウム・硫酸・水を入れて炭素板電極を挿入し、後者には硫酸を注いで、三角錐形に成形された亜鉛を設置する。当初電圧は約2ボルトで、主に電話用に使用された。ルクランシェ電池は口丸直方体のガラス外瓶に塩化アンモニア溶液を注ぎ、亜鉛棒を立てる。素焼き内瓶には集電用電極の炭素板を立て、その周囲には炭素粒と二酸化マンガンを充填する。国内では主に、胴部中央に横筋の入った円筒形ガラス外瓶が用いられていたようで、本遺跡出土資料がこれにあたる。電信・電話用に使用され、電圧は1.46ボルトを測る。各種電池の構造・原理・化学反応式などは、扇本・若目田ほか監修による『電池工学』（初版大正5年）に詳しい。

電気・電池関連のほかには、コバルト染付の坏・碗、型紙染付碗、銅版転写の小型湯呑、統制番号のある磁器、万古系の急須、ガラスボトル、ガラス小壺、ポルト、革靴底（未掲載、SD-06と近基5の間から出土）などがある。土産として持ち帰られたと推測される遺物もあり、酒杯の「湯元 木暮金（太夫）」（近基5-4）は伊香保の有名老舗温泉旅館である。SK-05出土の湯呑に見える「糸崎駅前風月旅館」は現存しない。「東海製陶」のロゴの会社は詳細不明ながら、SK05-3は理容道具（泡立て皿）と推測される。表上からは大正期と思われるシェービングマグカップも出土している。関連資料として、『群馬縣營業便覧』（明治37年）には、調査区南側、道向かいの連雀町4軒目に「理髪師 鞋髮舎 岩崎安太郎」の名が見える。「高崎繁昌記」（明治30年）には大広告とともに「小間物卸小売商（ご祝儀物籠甲斐珊瑚珠）理髪器械獣医器械踏鉄器械乳牛用具売捌所 田町 木暮彌平」とある。肥前輪花皿の底裏焼印「田町いつみや」（SK06-1）については、所産時期が18世紀末葉～19世紀中葉に比定され、『商家高名録』（文政10・1813年）において田町で太物足袋品々と信州上田御用薬所として貯積湯なる業を扱う「和泉屋幸七」に該当する可能性はある。仮に伝世を考慮した場合、前掲『便覧』の田町に「和泉屋 洋燈商 吉田幸太郎」の名が見え、前掲『繁昌記』には「油蛸燗卸小売 田町 和泉屋 吉田啓三郎」が掲載されている。（→77頁）

SD-10②



遺構外出土遺物



第22図 遺物実測図(5) SD-10② / 遺構外出土遺物

表 18 出土遺物観察表 (1) 電池・電気・電信・電話関連遺物 ①

遺物番号	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	裝飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		繪付・繪象	文様			
SK 06	電 1	磁器	乾電池 外瓶	ダニエル電池 長角瓶 (長平瓶)	長さ 12.3 幅 6.9 器高 12.7 仕切高 1.6/ 瓶 0.4 重量 628.9g	壓搾し	透明釉	底裏無印跡: 「全象」	白色			明治 44 年以降、兵災後 遺す「西曆八月二十六日 遺す電月用」も、内面に 電解液打痕跡多枚象		
SK 05	電 2	磁器	乾電池 外瓶	ダニエル電池 長角瓶	長さ 12.4 幅 6.9 器高 12.8 仕 切高 1.55/ 瓶 0.5 重量 793g	壓搾し	透明釉	底裏無印跡: 「全」	白色			近代、 内外面にニールナール、 底裏内面に重捺付着。		
SK 06	電 3	磁器	乾電池 外瓶	ダニエル電池 長角瓶	長さ 12.2 幅 6.6 器高 12.85 仕 切高 2.4/ 瓶 0.3 重量 765.6g	壓搾し	透明釉		白色			明治 22 (1889) 年以降 内面に新出した銅付着。		
SK 06	電 4	磁器	乾電池 内瓶	ダニエル電池 楕円瓶 (志遠筒)	口径径 10.0/ 瓶 3.3 器高 9.0/ 瓶 2.9 器高 10.1 重量 345.7g	押込み		底裏無印跡: 「モ」	褐色	常滑		明治 22 (1889) 年以降 内面に新出した銅付着。		
SK 06	電 5	磁器	乾電池 内瓶	ダニエル電池 楕円瓶	器高 8.85/ 瓶 2.9 器高 (4.1) 重量 133.2g	押込み		底裏無印跡: 「ト」	褐色	常滑		二代水野元光 (由吉) 元 明治 22 年以降。		
SK 06	電 6	磁器	乾電池 内瓶	ダニエル電池 楕円瓶	器高 8.85/ 瓶 2.9 器高 (4.1) 重量 34.8g	押込み		底裏無印跡: 「み」	褐色	常滑		明治 22 (1889) 年以降 内面に新出した銅付着。		
SK 05	電 7	磁器	乾電池 内瓶	円筒形 丸形赤地内瓶	底径 6.0 底径 5.8 器高 (3.6)	押込み		底裏無印跡: 「製」	褐色	常滑		二代水野元光 (由吉) 元 明治 22 (1889) 年以降。		
SK 06	電 8	磁器	乾電池 内瓶	円筒形 丸形赤地内瓶	底径 5.8 底径 5.4 器高 (3.2)	押込み		底裏無印跡: 「空製」	褐色	常滑		明治 22 (1889) 年以降。		
SK 06	電 9	ガラス 製品	乾電池 外瓶	円筒形	胴部中央に凹線起成線。2 線以上の上瓶電池に利用可と推測。 口径 9.9 底径 9.5 最大径 10.0 器高 13.95 器壁体部 0.5/ 底部 0.4 ~ 0.7							ルクラン電池		
SK 06	電 10	ガラス 製品	乾電池 外瓶	円筒形	胴部中央に凹線起成線。2 線以上の上瓶電池に利用可と推測。 口径 9.7 底径 9.78 最大径 9.9 器高 14.2 器壁体部 0.3 ~ 0.4/ 底部 0.4 ~ 0.5							ルクラン電池		
近代器	電 11	ガラス 製品	乾電池 外瓶	円筒形	破片。体部凹線削。器厚 0.4							ルクラン電池		
近代器	電 12	ガラス 製品	乾電池 外瓶	円筒形	破片。体部凹線削。器厚 0.6							ルクラン電池		
SK 06	電 13	ガラス 製品	乾電池 外瓶	口径円形、体 部部丸立方体	口径 (10.0) 器高 (6.5) 器厚 0.4							ルクラン電池もしくは フーラー電池		
SP 04 SF 05	電 14	金属 製品	乾電池 電池	板状	電極部に幅 1.45 のスリットを開口し、導電板を挿入・折り曲げ張り付留め、銅線。 全長 10.2 電池部: 幅 7.1 ~ 7.5 高さ 7.5 厚さ 0.37 ~ 2.1 mm 導電部: 長さ 10.8 幅 1.6 (接線部 1.4) 先端孔径 0.8 厚さ 0.52 ~ 0.61 mm 全重量 50.7g							近代。		
SK 06	電 15	金属 製品	乾電池 電池	板状	導電部と接線。銅線。全長 11.7 長さ 0.3 ~ 0.4 mm 重量 3.7g							近代。		
SK 06	電 16	金属 製品	乾電池 電池	板状 (板厚部)	胴部右側端に口、成形内に「OKI」。胴部中央に溝す用ネジ孔。ネジ孔と直交する方形成。 胴部全面に新着付着。頂部電池ターミナルは別製銅製。 全長 17.1 胴部板長 14.0/ 長さ 0.9 頂部上端幅 1.9/ 下端幅 6.1/ 厚さ 1.4 重量 103.7g								沖電機工場製。 明治 22 (1889) 年以降。 底裏に「OKI」の文字あり。	
SK 06	電 17	金属 製品	乾電池 電池	板状 上下両面	上部面に金属付着。長さ 12.6 底径 2.3 重量 99.06g							ルクラン電池。		
SK 05	電 18	乾電池	円筒形		外壁部鉛皮。二酸化マンガンの中平仕状の間に硫酸液を詰め込んで密封。外壁とマンガン の間に炭化繊維付。マンガン内面に板状炭素電極各 1 本。炭素。劣化著しい。日本乾 電池高容量式大受型と推測。高さ (15.3) 底径 7.6 ~ 7.8 重量 (1161.8g)								近代。大正 7 (1918) 年 以降。	
表土	電 19	金属 製品	電圧 プラグ		電圧交換用プラグ。未始部内面にネジ溝。体部中央のカーブは欠損。銅製。先端部のみ 銅製。長さ 8.8 厚さ 0.95 端子先端径 0.5 重量 29.2g							近代。		
SK 06	電 20	金属 製品	導電線		銅製。主線径 0.3 副線径 0.13 重量 20.2g							近代。		
SP 01	電 21	木製品		円形	上部に小円孔 1。側面に溝。表: 「ダニエル 30」裏: 「重高 2 通信」 直径 2.5 厚さ 0.2 重量 1.97g							尙遺部利用の残。木 製品。		
SK 12	電 22	磁器	磁子	二重筒形 茶台磁子	上層径 3.3 上層径 9.4 下層 径 3.5 下層径 7.3 孔径 2.1 高さ 12.1 重量 479.9g	型打	透明釉	コバルト記号: 「ア」	白色			近代。 引込 (引込) 磁子。		
表土	電 23	磁器	磁子	二重筒形 茶台磁子	下層径 8.2 下層径 3.8 円孔 径 1.9 高さ (7.4) 重量 479.7g	型打	透明釉	コバルト記号: 「ア」	白色			近代。 引込 (引込) 磁子。		
SK 05	電 24	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	上層径 5.4 下層径 7.6 内層下層径 4.1 高さ (11.5) 重量 562.2g	型打	透明釉		白色			近代。 内面ネジ溝。		
SK 06	電 25	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	上層径 5.0 内層径 4.0 下層径 (7.8) 高さ (9.5) 重量 562.2g	型打	透明釉	コバルト記号: 「カ」	白色			近代。内面ネジ溝。		
近代 基礎 5	電 26	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	下層径 (7.8) 高さ (8.0)	型打	透明釉	コバルト記号: 「ウ」	白色			近代。		
SK 06	電 27	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	下層径 (7.8) 高さ (8.0)	型打	透明釉	記号: 「KORAN」	白色	肥前		近代。香焼社製。		
SK 06	電 28	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	下層径 (9.6) 高さ (3.3)	型打	透明釉	記号: 「K」	白色			近代。		
近代 基礎 5	電 29	磁器	磁子	円筒形、二重 筒状磁子	内層径 3.0 下層径 5.4 高さ (8.8)	型打	透明釉	コバルト記号: 「ク」	白色			近代。内面ネジ溝。		
表土	電 30	磁器	磁子	ノップ磁子	上層径 3.2 下層径 3.6 円孔径 0.8 高さ 5.1 重量 5.1g	型打	透明釉		白色			近代。内内用。		
表土	電 31	磁器	磁子	ノップ磁子	上層径 2.1 下層径 2.1 円孔径 0.6 高さ 2.9 重量 5.2g	型打	透明釉		白色			近代。内内用。		
SK 05	電 32	磁器	磁子	板状 円孔磁子	長さ 8.4 幅 (5.7) 高さ 2.5	型打	透明釉		白色			近代。内内配電線用。 孔 3 以上。		
近代器	電 33	磁器	磁子	角棒状 タリ磁子	長さ 8.4 幅 1.8 高さ 1.4 孔径 0.7 重量 35.9g	型打	前面白磁釉 内: 透明釉 外: 無釉	成形無印跡	白色			近代。地内用。縦 2.孔 2。 2 線底径タリ磁子。		
近代器	電 34	磁器	磁子	管状、環状 (5φ10φ)	長さ (11.7) 直径 1.2 孔径 0.7	型打	内: 透明釉 外: 無釉		白色			近代。内内 (建材用) 用。 厚さ不均等。		

表 19 出土遺物観察表 (2) 電池・電気・電信・電話関連遺物 ②

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (基準)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		絵付・捺刷	文様			
SK 06	電 35	珐瑯	蓄電池 内蔵	円筒形、 丸形突起内蔵	底径幅 3.6	器高 1.90	底厚 3.2	筒込み		底裏刻印銘: 「電製 上原製電」	褐色	常滑	二代水野元光 (由山) 寛 明治 22 年以降。内面 に小形・炭化物・黒炭片 を含む滑石充填。粉出金 裏付着。	
SK 06	電 36	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (4.8)	底幅幅 2.75	器高 (2.1)	筒込み		底裏刻印銘:「電」	褐色	常滑	明治 22 年以降。内面 に粉出した銅付着。 電 36 ~ 44 は底花のみ	
SK 06	電 37	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (4.0)	底幅幅 (2.6)	器高 (1.8)	底厚 0.62	筒込み	底裏刻印銘:「電」	褐色	常滑	明治 23 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 38	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (6.0)	底幅幅 (2.7)	器高 (4.5)	底厚 0.38	筒込み	底裏刻印銘:「フ」 香蘭生製電	褐色	常滑	明治 24 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 39	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (2.9)	底幅幅 2.65	器高 (4.1)	底厚 0.35	筒込み	底裏刻印銘:	褐色	常滑	明治 25 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
近代基 礎 40	電 40	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (1.7)	底幅幅 0.5	底厚 0.78	筒込み		底裏刻印銘: 不明文字記号	褐色	常滑	明治 26 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 41	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (4.6)	底幅幅 2.8	器高 (2.9)	底厚 0.3	筒込み	底裏刻印銘:「ウ」	褐色	常滑	明治 27 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 42	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 8.2	底幅幅 3.18	器高 (8.2)	底厚 2.9	筒込み	底裏刻印銘:「み」	褐色	常滑	明治 28 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 43	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (4.1)	底幅幅 1.9	器高 (2.0)	筒込み		底裏刻印銘:「六」	褐色	常滑	明治 27 年以降。内面 に粉出した銅付着。	
SK 06	電 44	珐瑯	蓄電池 内蔵	タンニル電池 楕円形	底部長 (2.7)	底幅幅 2.7	器高 (2.2)	筒込み		底裏刻印銘:「井」	褐色	常滑	明治 28 年以降。内面 に粉出した銅付着。	

表 20 出土遺物観察表 (3) 近代基礎 ① (瀬戸・美濃と肥前の時期幅年は「江戸時代の瀬戸窯」「九州陶磁の幅年」に拠る。)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (基準)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期		
					口径	器高	底径	最大径		絵付・捺刷	文様					
近代 基礎 2	1	陶器	小杯	底部一高台 備え附	6.2	4.51	3.1	型押し 手揉ね	鉄絵 透明釉	内: 走り文 (左用)	灰白色 鉄分多い		肥前製「金魚」			
近代 基礎 3	1	ガラス 製品	特製高 ガラス	亀甲型入り 型抜きガラス	1935 (昭和 10) 年以後、 ロールアクト造。	20	6.03						1922 年以降。			
近代 基礎 5	1	磁器	碗	丸形	(11.0)	4.93	4.0	ロクロ	裏紙絵付、 真鍮 透明釉	内: 緑内灰青文 外: 牡丹文、 紫雲唐文	白色	瀬戸・ 美濃	近代 高台器目。			
	2	磁器	杯	丸形	6.9	4.7	2.6	ロクロ	陶付、真鍮 透明釉	外: 松文、貝文 雲文	白色	瀬戸・ 美濃	瀬戸方出十。 3と2番揃い。			
	3	磁器	杯	丸形	0.7	8.4	2.7	ロクロ	陶付、真鍮 透明釉	外: 松文、貝文 雲文	白色	瀬戸・ 美濃	瀬戸方出十。 2と2番揃い。			
	4	磁器	海手 酒杯	丸形 向高台	—	(2.0)	2.55	ロクロ	色絵 (青)、上 絵、透明釉	内: 見込唐文文 に「唐元木尊金」 外: 高台唐文	白色	瀬戸・ 美濃	美濃陶磁内史形文字 1830 年代以降			
	5	磁器	碗	丸形 輪状口	9.9	2.85	3.7	ロクロ	陶付、真鍮 透明釉	内: 緑内陶磁因 方唐文、見込陶 陶内玉雲花唐文 外: 半堂唐文	灰白色	波佐見	V-2 期 1750 ~ 1770 年代			
	6	陶器	碗	杉形	8.9	5.41	3.7	ロクロ	灰青 高台無釉		灰白色	京・ 信楽系	7と入れ子。 19 世紀代。			
	7	陶器	碗	楕円形	8.4	4.85	3.5	ロクロ	真鍮 透明釉	外: 襷子文	浅灰色	京・ 信楽系	6と入れ子。 19 世紀代			
	8	漆器	急須	壺受け付	6.4	5.7	6.5		唐付、真 ・口付 陶付	脚部唐漆黒刷目	灰色	万古漆	近代 把子漆に唐付「萬古」 刷目方出			
	9	漆器	急須蓋	回転滑み	6.9	1.6/ 2.45	—		型打つ ロクロ	上色絵 (金・黒・ 赤・青・緑)、イッ チン (白・黄)	紺正文、赤花文 余紅・黒縁無 粉内「君子」	暗灰色	万古漆	瀬花紋細輪組み、 上部小孔。1 刷目方出		
	10	陶器	灯明 受皿	油滴切立状	7.0	1.4	3.1	ロクロ	鉄軸 (漆)		灰色	瀬戸・ 美濃	第 9 小期 1800 ~ 1820 年代			
	11	陶器	灯明 受皿	油滴切立状	7.2	1.5	3.6	ロクロ	鉄軸		にぶい 黄褐色	瀬戸・ 美濃	第 8・9 小期。18 世紀後 葉 ~ 1820 年代			
	12	陶器	燗瓶	付たんころ 形、底部特孔	4.2	5.7	4.3	ロクロ	陶軸		にぶい 褐色	瀬戸・ 美濃	第 7 小期 18 世紀中期			
	13	陶器	香炉	平筒形 有三足	10.4	6.3	7.3	ロクロ	灰軸 三足唐付 底紙無釉	外: ヘク割り 平染文	にぶい 黄褐色	瀬戸・ 美濃	ロ線割打直。 第 7 小期 18 世紀中期			
	14	石製品	砚	長方鏡	砚の 2 次加工品。硯石・硯割削落着。中央部を方形状に決り切る。端部欠損。取手 616.5g 左 ルンアルク型。長さ (14.4) 幅 7.85 高さ (3.1) 硯割削落 0.52/0.65 硯の欠部: 上端 8.6 × 4.9 下端 6.8 × 3.3											
	15	ガラス 製品	瓶		ワインボトル。キップ頭部は半球形。濃緑色半透明。高さ (8.0) 底径 6.0 キップ径 5.5 最 大径 (7.3) キップ径 4.3/2.85 器壁 3.5 ~ 8.5 ヒール (内) 4.3/ (外) 2.85											近代
	16	金属・ 木製品	包丁		鉄製刃部と木製柄。葉切刃下丁。柄は柳材漆塗し込み。包丁全長 21.2 柄長さ 9.9 柄幅 1.3 ~ 1.5 刃長 16.1 刃厚 0.9 刃部幅 4.3 開張 1.3 刃根 0.9 高さ 5.6 基準 1.4 ~ 0.85 厚さ 0.1 基準 0.2											近代

表 21 出土遺物観察表 (4) 近代基礎 ②

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径	最大径		絵付・釉薬	文様				
近代基礎②	1	磁器	碗	腰板形 小皿	7.1	4.9	3.8		ロクロ	絵付、呉須 透明釉	内：緑内赤文 外：青花文、意 内赤文・藍文	白色	瀬戸・美濃	近代	
	2	磁器	鉢	輪花形 地の目録高台 圓形高台	17.4	7.35	7.7		摺り打 ロクロ	絵付、呉須 透明釉	内：区画文、草 花文、見込目花文 外：至文1本	白色	肥前	12号、1820～1800年代 (V期)	
	3	陶器	鉢鉢	丸形	15.5	9.25	6.8	17.1	ロクロ、 高台貼付 焼付刷出し	灰釉 黒下黒釉		黄白色	瀬戸・美濃	見込ビン類、 第10小皿 1820～1840年代	
	4	陶器	土瓶	丸形 蓋受け有 脚足	8.9	9.95/ 10.4	8.95		ロクロ、 耳・注口 貼付	内：透明釉、外 灰、灰、白 流	外：額上黒色 7本、胴部 沈黙3本	にぶい 黄褐色		蓋受けに化粧土、 注口欠損、底部破	
	5	石製品	茶碁 石	碁石状 やや楕円形	金剛砂磨、長径2.3 短径1.95 厚さ0.7 重量4.7g										
	6	土製品	押鉢玉	碁石状	手ビネリ、長径2.15 短径2.0 厚さ0.35 重量2.32g										
	7	土製品	押鉢玉	碁石状	手ビネリ、径1.92～1.95 厚さ0.54 重量2.27g										
	8	金属製品	ボルト	四角頭部	鉄製、全長11.8 螺帽2.6 呼び径10.5 (ネジ部5.5) 呼び径1.35 ネジ山ピッチ0.214 重量130.1g										土台板(梁材用)の 留ボルト

表 22 出土遺物観察表 (5) 土坑 ① (瀬戸・美濃と肥前の時期編年は『江戸時代の瀬戸窯』『九州陶磁の編年』に拠る。)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		絵付・釉薬	文様			
SK 01	1	陶器	皿	丸形 底広	14.8	3.75	6.2		ロクロ 付高台	鉄絵、鉄線 後、絵付無施	内：藍文	灰色	瀬戸・美濃	1670～1770年代 (1724年頃)
SK 02	1	磁器	紅箱口	半形	6.4	2.1	2.5		摺り 高台	透明釉	外：地草	白色	肥前	近代
SK 05	1	磁器	湯呑 茶碗	半圓形	7.0	3.3	7.0		ロクロ	透明釉	外：字の字状・ 井形赤文	白色	瀬戸・美濃	近代
	2	磁器	灰皿	筒形	4.6		(11.0)		摺り 高台	外：青磁釉 内：透明釉	内：委實 紙書法書	白色	近代	英書法書「述一」 近代、シーボルトの 記述で通
	3	磁器	宝形皿	宝形	3.8			(11.7)	摺り	透明釉、緑下 色釉	外：矢十字、底 裏面「東海御陶」	白色	瀬戸・美濃	近代
	4	陶器	器口	輪形 腰板高台	5.4	3.2	7.1		摺り	透明釉、緑下色 釉、「山陽陶器製陶 所製」	乳白色	瀬戸・美濃	近代	
	5	土器	七輪 さな	碗形	22.8	7.9	17.4		摺り		明赤色	在地産	内面無施着、 口孔10、近代	
	6	土器	七輪 さな	円盤型	14.6	1.8			摺り		明赤色	在地産	表面無施着、 口孔12、近代	
SK 09	1	磁器	皿	輪の目録高台 輪花沈黙	(14.5)	4.6	8.2		ロクロ	絵付 呉須、透明釉	内：暗文、雲文 山水文	白色	肥前	V期 (1780～1800) の輪。底裏に印(文字) 「田町いづみや」
	2	複製品	匙	長柄形	長さ19.1 柄頭厚さ1～2mm 基部厚さ0.2mm 基部断面は圓形にたらず、平直。									
	3	石製品	火鉢	楕圓形	(20.4)	27.8			摺り			灰色	近代、石炭火鉢。	
SK 11	1	陶器	小甕	半圓形	11.5	8.5	6.3		ロクロ、 底底左内 面点綴			褐色	底面穿孔、楕形捺輪、 近代	
SK 12	1	磁器	碗	筒筒形	10.6	7.2	7.5		ロクロ 三足貼付	透明釉、絵付 タガ鉄線	内：藍文、御板 外：藍文、御板	白色	肥前	近代
SK 15	1	土器	墨伊 (瓶か)	胴丸形	(24.0)	23.9	21.6		ロクロ 脚有貼付	褐色地、 墨色地、 ミガキ	内：受け足落 外：口縁直	灰色	在地産	19世紀前半～中葉
SK 21	1	陶器	火鉢	楕圓形	(22.0)	27.7	23.0		ロクロ 内高台	鉄線	外：印花、高台 部露文、胴部 段部貼付2本	乳白色	瀬戸・美濃	19世紀前半～中葉 SK 09・12・23・76・ SJ 02・近畿3郡り方
	2	陶器	土瓶	丸形	8.8	(1.8)	6.2		ロクロ 廻り貼付	灰釉		にぶい 褐色	松岡	19世紀前半～中葉
SK 22	1	磁器	碗	丸形	8.0	3.8	3.5		ロクロ 内高台	外：クロム 青磁釉 内：透明釉	内：見込3重 内内赤文等 外：藍文	白色	瀬戸・美濃	1890年代以降
	2	陶器	モウ チヤア	茶碗形	2.8	3.0	1.8	4.3	摺り		外：上半部 灰釉 体部ハート形 口孔	黄褐色		ままと道具。
SK 24	1	陶器	碗	腰丸形反形 「ピン掛機」	7.0	5.1	2.9		ロクロ 内高台	外：白磁釉、 鉄線 内：白磁釉		灰色	肥前	1640～1850年代、 近代
	2	土器	片手筒		(12.6)	3.0	(11.8)	(5.6)	ロクロ 廻り貼付			褐色	在地産	把手小口孔2、 外面磨行致。
SK 25	1	磁器	碗	腰板 深底形	9.8	5.3	4.2		ロクロ 高台貼付	絵付 呉須、透明釉	内：口縁赤文、 見込内赤文 外：青花赤文	白色	肥前	1850～1870年代、 近代
	2	複製品	茶碁 石	碁石状	頭部断面は楕圓(長：2.7 幅：1.9) 重量1.0 長さ17.6 厚さ高さ2.4 頭径1.0 厚さ0.2 重量7.07g									
SK 27	1	磁器	湯呑 茶碗	丸形	(6.6)	—	—		ロクロ	透明釉、鉄線	外：輪下 色(深赤陶器)	白色	瀬戸・美濃	戦後、『鮮馬都佐 記』(明治37年)に 標本 内高台は深赤陶器
	2	ガラス	小皿	円筒形	—	(5.8)	2.6							底裏に梅花形

表 23 出土遺物観察表 (6) 土坑 ②

遺構名	番号	材質	器種	形状特徴	質量 (cm) (鑑定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		繪付・輪郭	文様			
SK 28	1	陶器	茶碗	台形 たんころ形 輪孔あり	5.5	4.3	4.0	6.8	ロクロ、 底部印転 糸切	内外鉄輪		灰白色	瀬戸・ 美濃	18世紀後葉、 瀬戸土坑の埋入。
	2	陶器	灯明 臺台	圓口梨形受	8.7	4.7	4.7	(13.2)	ツクロ 押形底	灰緑		灰白色	瀬戸・ 美濃	17世紀後葉～18世紀前 葉。(1724年頃)
	3	石製品	砥石	舟形状	最大長 12.2 幅2.8	最大幅 2.7	最大厚 1.9	重さ 97.4g	側面のうち1面を平滑に研削・磨耗。			完形。		
SK 35	1	磁器	碗	腰反形	9.3	4.4	4.2		ロクロ 高台貼付	染付 引象、透明釉	内：見込重圓 線内完成文 外：腰山水文	乳白色	肥前	1810～1820年代 (V期)
	2	陶器	碗	腰反形 (腰高深)	9.5	5.2	3.9		ロクロ 削り高台	口縁外～内面 灰緑、外面鉄 輪		黄褐色	瀬戸・ 美濃	第10小期 1820～1840年代
	3	陶器	碗	平形 (輪高縁)	10.2	4.8	3.3		ロクロ 削り高台	鉄輪 灰緑	外：柳文	灰白色	瀬戸・ 美濃	1780～1820年代
	4	陶器	小杯	輪反形	3.8～ 4.1	2.4	1.6		手ねね 削り高台	灰赤		灰白色	瀬戸・ 美濃	
	5	陶器	土瓶	尊盤玉形	(7.0)	(6.5)		(19.0)	ロクロ、耳、 柱口貼付	内：鉄輪、外： 青緑、鉄輪		灰白色	肥前	19世紀初葉～中葉、 新上砂位多量。
	6	陶器	土瓶	尊盤玉形	(6.5)	(6.5)		(16.4)	ロクロ 耳貼付	内：鉄輪、外： 青		灰褐色	肥前	19世紀初葉～中葉、 新上砂位多量。
	7	陶器	灯明 受皿	圓筒 口短式	7.7	1.4	3.7		ツクロ	内：鉄輪 外：鉄輪		灰褐色	瀬戸・ 美濃	第9小期 1800～1820年代
	8	土器	燈罩	梨形 平盤形	(23.0)	19.8	21.2		ロクロ 二足貼付		外：薄黒型文 線上部淡緑3条		褐色	在地赤
SK 38	1	磁器	碗	平盤形	(7.2)	3.4	3.8		ロクロ 削り高台	染付 引象、透明釉	内：口縁内縁淡 2条見込玉弁花 外：矢羽文	灰白色	肥前	1780～1810年代 (V期)
	2	磁器	碗	平盤形 楕形	6.7	5.1	3.3		ロクロ 削り高台	透明釉 鉄輪	外：口縁、糸目 夕加波淡緑線	白色	肥前	蓋付、輪反高台
	3	陶器	灯明 受皿	圓筒 半月状	10.2	1.9	4.3		ロクロ	灰赤		灰白色	京・ 伊豆	18世紀第4期半頃。
	4	陶器	香炉	半月形	5.1	4.6	3.1		ロクロ 高台貼付	内：黒釉 外：黒塗丹繪		灰白色	瀬戸・ 美濃	
	5	陶製品		タタキ状	端部削り取。長さ(8.5)幅(6.0)厚(1.8)									透焼材端部の埋溝を見か
SK 39	1	石製品	穀物口 上臼	6分厚。副溝0。安山岩製。上端底径37.2 側面部最大径(37.8) 高さ13.0 下端底径32.0 ふちみ径3.4 芯棒孔径4.2 供給孔径3.2×3.7 扉み径2.5 扉み厚3.0 柄台底径3.0 重量21.8g										
SK 44	1	磁器	碗	端反形	(11.2)	6.2	4.3		ロクロ	染付 引象、透明釉	内：見込重文 外：竹文	灰白色	波佐見	磁紋、底裏文字「〇〇〇 〇〇」1820～1860年代 SK 101と接合
	2	磁器	碗	広葉形 [広葉輪]	11.5	5.9	6.1		ロクロ 削り高台	染付 引象、透明釉	内：口縁縁部2 条見込火炎 雲文 外：松文、高台 西角付番字	灰白色	波佐見	1820～1840年代 SK 101と接合
SK 55	1	磁器	碗	丸形	9.0	3.9	3.1		ロクロ 高台貼付	染付 引象、透明釉	内：見込重圓 線内玉弁花 外：東屋山水文	灰白色	波佐見	ロンエヤク印 V-2期 1780～1770年代
SK 56	1	磁器	輪蓋	笠笠球状 蓋	6.2	1.8	3.0		ロクロ	染付 引象、透明釉	外：東屋山水文	灰白色	肥前	IV期 1680～1780年代 (1724年頃)
	2	陶器	片口鉢	口縁切込 丸形	18.7	9.4	8.0		ツクロ 削り高台	内外鉄輪 線下部 見込ヒラ線3		明黄褐色	瀬戸・ 美濃	第7～8小期 18世紀中葉～後葉 (1724年頃)
	3	陶器	土瓶	尊盤玉形	9.9	(13.7)		21.6	ロクロ、耳、 柱口貼付	内外鉄輪 灰黒同底無輪		灰色		内外ロクロ底面若 (1724年頃)
	4	陶器	土瓶蓋	赤し蓋形	8.0	2.7	5.4		ツクロ、 彫花彫 み貼付	内：無輪 外：鉄輪		灰色		SK 56-3の蓋 (1724年頃)
	5	瓦	小丸 軒瓦		長さ(12.3)幅(23.0)厚さ1.9 平部削り 1大板(口)の「口」								灰色	
SK 57	1	磁器	碗	腰反形	9.0	4.5	3.8		ロクロ 高台貼付	染付 引象、透明釉	外：松文、 線文	白色	肥前	1820～1860年代 (V期)
	2	磁器	仏花 瓶	逆巻 喇叭口形	(8.7)	14.9	5.7		ツクロ、 削り高台 砂目	青磁輪	逆巻の両耳貼付	灰白色	波佐見	V-2-4期 1750～1860年代
	3	陶器	土瓶	尊盤玉形 (背土瓶)	7.3	10.0	7.8	15.9	ロクロ、耳、 柱口・二 足貼付	内：透明釉 外：青磁輪		灰白色	伊賀	逆位耳割部後、両側の耳 割付。底部様多量付着。
	4	陶器	鉢鉢	丸形 口縁玉縁	(33.0)	16.0	14.7		ロクロ、 足込目貼 3以上	灰黒 線下部無輪		明黄褐色	瀬戸・ 美濃	第10小期 1820～1840年代
	5	石製品	石臼	半月形 蓋付	安山岩製。平文。 長さ(11.2)幅(10.0)高さ7.1 重量690g									
SK 59	1	磁器	碗	浅平鉢形	10.1	4.9	3.8		ツクロ 削り高台	染付 引象、透明釉	外：格子状草花 文	灰白色	肥前	1780～1860年代
	2	石製品	砥石	板状	長さ(9.7)幅(4.6)厚さ1.1 増部欠損。増部欠損部、 3/4に凹み付。埋割。									
	3	骨角器	骨	楕状	両端部欠損。彫刻有部。長さ(11.1)幅(0.6～0.9)厚さ(0.4)重量6.76g									

表 24 出土遺物観察表 (7) 土坑 ㊸ (瀬戸・美濃と肥前との時期隔年は『江戸時代の瀬戸窯』『九州陶磁の権年』に拠る.)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	寸法 (cm) (推定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	高さ	底径	最大径		絵付・釉薬	文様			
SK 60	1	磁器	碗	平筒形	7.6	5.7	3.5		ロクロ 削り高台	染付 呉紙、透明釉	外: 若松文	灰白色	肥前	1780 ~ 1810 年代 (V 期)
	2	磁器	小瓶	六角形 輪蓋形 輪蓋台		(6.0)	3.6	5.0	ロクロ	染付 呉紙、透明釉	外: 若松文	灰白色	肥前	V 期 1780 ~ 1860 年代
	3	陶器	碗	六角形 (木付碗)	9.0	5.2	3.5		ロクロ 削り高台	呉紙、鉄絵 透明釉	外: 若松文	明灰褐色	京・信楽	1760 ~ 1790 年代か SK 81 と接合
	4	陶器	仏花瓶	瓶口 丸形	(8.0)	14.5	7.0		ロクロ、耳 磨付、左 面糸巻	内: 内、耳 面上下灰釉、 外面下半灰釉		灰白色	瀬戸・美濃	1750 ~ 1860 年代か
	5	土器	鬼持	瓶口 丸形	25.2	(5.3)			型押し ロクロ削 製	腹底下の対向する位置に底径4mm の銅線用小孔2箇所、使用済み。		褐色	在池津	SK 56 と接合。
SK 60	6	瓦	結丸瓦 棟瓦		長さ 31.4 棟部長さ 5.4 内径 10.4 外径 12.5 ~ 13.9 小口長 1.7 厚さ 1.78/2.1 重量 206/27g					内面: 有目煎後、横穴・縦穴ナデ、 海部煎取り。 外面: 半平丸底筋貼付、ナデ。		青灰色 ~ 褐色		
	7	石製品	磁石	板状	上増面以外、6面平削。底穴貫通。					長さ 8.4 幅 4.9 厚さ 2.25 重量 163.6g				
	8	石製品	七輪	扇形 扇形	最大径 23.8 高さ (8.4) 底径 17.8 意高 3.0 意幅 6.7 重量 496.0g 上半部欠損。裏面外化現象。裏口縁磨き、平底。									
	9	石製品	砂皿		内面に鋼の付着。ヌメリ混成粘土・漆喰混。重量 74.32g。									
SK 62	1	石製品	砂鉢		底径 3.7 口径 7.5 厚さ 1.7 重量 39.04g					全面研削。彫刻成形。漆喰混製。				古代遺物の混入か。
	2	磁器	碗	丸形 (海苔茶碗)	7.3	6.1	3.5		ロクロ 削り高台 目	染付 呉紙、透明釉	横線文、竹文 海苔筋弁文	白色	肥前	V 期 1780 ~ 1860 年代 程度。
SK 65	1	陶器	土瓶	器蓋三角 (背土瓶)	6.7	12.5	(5.8)	17.5	ロクロ	内: 下半灰釉 外: 青緑釉		乳白色	伊賀?	底部周辺埋付者。
	3	金属 製品	煙管 吸口		長さ 8.2 最大径 1.2 口部径 0.48 重量 7.22g 片割製。丸形。								As-A 降灰前	
	2	瓦	小丸 軒瓦	瓦蓋部	瓦当外径 9.2 内径 7.7 厚さ 1.9 「裏の割折筋」の家紋瓦面。御形。								As-A 降灰前	
SK 66	1	土製品	羽口	円筒形	先端径 3.8 口径 1.0 下端径 4.9 口径 2.0 長さ 21.4 重量 469.1g 下腹から先端へ外縁・孔部にムシ掘り。底平坦。彫刻形。							内部褐色	在池津	As-A 降灰前
	3	石製品	磁	立方体	1/3 残存。長さ 17.95 幅 (4.6) 厚さ (1.6) 重量 189.9g。全面平滑。黒色粘板岩製。 裏面彫刻「本(舟)水(舟)火(口)白(口)水(舟)」。裏面目録あり。								As-A 降灰前	
	1	磁器	碗	丸形 厚手	9.9	(5.1)			ロクロ 削り高台 付	染付 呉紙、透明釉	外: コンニャク印 横線文、底裏 筋深し溝掘	灰白色	肥前	1700 ~ 1740 年代か (IV 期) (As-A 降灰前)
SK 67	2	土器	虎斑盛 受注小	四角形 受注小	5.65	7.85	4.7 ~ 5.1	7.15	板作 底筋削込			黄褐色 ~ 褐色		一直線内面不明部印4字 底へ体部1字連続 (As-A 降灰前)
	3	其他用 製品	ミニ チュア	磁製	長さ 5.2 幅 3.3 高さ 1.6 地脚高 2.8 地脚幅 1.4 地脚厚さ 0.6 重量 39.82g 5片を組用した製のミニチュア。全面研削。									
SK 68	1	陶器	碗	新形 (せんじ碗)	8.5	4.05	3.3	6.75	ロクロ 削り高台	包結、上治 灰釉。高台煎削	笹文、花文	灰褐色	京極寺	18 世紀中葉 ~ As-A 降 灰前 (1724 年頃)
	2	陶器	水注	器蓋形	4.0	10.2	5.8	7.9	ロクロ、 手・注口 貼付	灰釉 器部下無釉		乳白色	瀬戸・美濃	18 世紀前半 ~ 中葉 (1724 年頃)
	3	陶器	土瓶	器蓋玉形 (赤目土瓶)	(11.4)	(11.5)		(20.0)	内~外面上半 耳・注口 貼付 器下無釉		胴上部赤目	暗褐色 ~ 褐色		18 世紀代 ~ As-A 降灰 前 (1724 年頃) に接合済み
SK 69	1	石製品	磁石	板状	板形磁石。一側面のみ研削。端部欠損。長さ (10.6)					内: 見込み 段の自給割き 外: 草花文。 高台輪印線2条 高台内面磨1条		白色	被灰見 穿	V-1 期 1680 ~ 1740 年代 (遺物は 1783 年直前)
SK 73	1	磁器	碗	丸形	(10.2)	5.15	4.0		ロクロ 削り高台 付	染付 呉紙、透明釉		灰白色	肥前	IV 期 1690 ~ 1780 年代 (1783 年頃)
	2	磁器	仏經具	台状高台	7.5	4.6	3.8		ロクロ 削り高台 付	染付 呉紙、透明釉	外: 草花文	灰白色	肥前	1670 ~ 1770 年代か (遺物は 1783 年直前)
	3	陶器	皿	木瓜形	(13.8) (9.8)	3.1	5.8		型押し 削り高台 貼付	御形弁巻	内: 見込み 草花文印刷	乳白色	瀬戸・美濃	SK 69・SK 80・SK 01・ SK 02 に同一個体。
	4	陶器	箱庭 道具	器形 底面穿孔	幅 (9.2) (4.0) 高さ (5.4) (7.0)				型押し 手扣	内: 鉄板 外: 透明釉・灰釉	岩肌、灰	浅黄褐色		
	5	環状衝 透遺物	伊壁		長さ 7.7 幅 6.3 厚さ 1.2 重量 37.5g									
	6	環状衝 透遺物	伊壁		長さ 12.4 幅 9.4 厚さ 1.6 重量 276.4g									
SK 81	1	陶器	灰吹	六角形 底面削込	2.9/ 4.6	7.5	5.7/ 6.5		型押し 削り高台	真紙、鉄絵 透明釉	竹筒文	黄白色	京・ 信楽系	18 世紀第3期半期頃
SK 82	1	陶器	碗	楕円形	9.2	4.65	2.9		ロクロ 削り高台	内外灰釉 高台煎削		黄白色	京・ 信楽系	1780 ~ 1860 年代
SK 83	2	土製品	大形		高さ 2.7					手捏			黄白色	供を控へた人。
	1	土製品	土鍋	球形・中空	長さ 6.6 幅 2.5 高さ 3.1					型押し	柄部鉄染		乳白色	在池津
SK 84	1	陶器	片口鉢	丸形 口縁削込	12.1	6.4	6.0		ロクロ 削り高台	内外灰釉 高台煎削 見込ヒンズ		黄白色	瀬戸・美濃	第8小項、18 世紀後半 ~ As-A 降灰前

表 25 出土遺物観察表 (8) 土坑 ④

遺物番号	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	裝飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径	最大径		絵付・線装	文様				
SK 88	1	土器	片手瓶		13.0	3.7	(9.0)	(13.0)	ロクロ 絞手貼付			浅黄褐色	在地高	把手の小孔1。 A ₁ - A ₂ 段内底面	
SK 100	1	金属 製品	筒子か		全長 (14.3) 胴部長さ 11.4 底部幅 (3.3) 胴部幅 0.7 ~ 1.25 筒部厚さ 1.70mm 胴部厚さ 0.67mm 重量 13.23g 青銅製。								18 世紀末葉 ~ 19 世紀中葉		
SK 101	1	金属 製品	鈴	耳縁きび	全径 13.9 耳縁部長さ 1.9 厚さ 0.18 重量 6.26g 真鍮製。								1780 ~ 1840 年代*		
SK 106	1	石製品	硯	板状	全長 19.8 幅 5.8 ~ 6.0 厚さ 1.2 ~ 1.5 重量 241.8g 両面曲線状、溝部欠損。漆喰付着。粘板製。								18 世紀前半 ~ 中葉 No. 8		
SK 115	1	陶器	甕	兵器形 (兵器手取)	11.0	7.7	4.2	11.7	ロクロ 透明釉			灰白色	肥前	IV 期 1600 ~ 1780 年代 (1724 年以前)	
	2	石製品	砥石	板状	長さ 16.5 幅 4.0 厚さ 2.5 重量 390.7g 完成。 上下両面やや平陸。左側面と上面の一部が硝子肌著。裏面は雲形磨痕存。粘板製。										
	3	石製品	大坪石	新面芝台形 凹状	側面が芝台形状を呈する平面的な正方形の石。脚欠損。SS 02 から同一 個体出土。 長さ (15.2) 幅 (13.7) 高さ 10.0 重量 1482.3g 角閃石安山岩製。										
SK 118	1	漆器	漆鉢	口縁外巻 二段、内巻、 縁内点漆小	(31.4)	11.8	13.0		ロクロ べつ底			赤褐色 砂粒多量	埴、 明石系	鎌倉前後 10 本単位。見 込み脚目 8。18 世紀初 頭 ~ 頭半頃	
SK 123	1	磁器	磁	中間器	7.8	6.2	4.0		ロクロ 染付 呉須、透明釉	内：縁内四角文 、見込玉直線 内五弁花印 外：菊文		白色	肥前	コンコウ印 高台磁石。 1740 ~ 1780 年代 (IV 期)	
	2	磁器	皿	見込碗の目 輪刺青	14.0	2.8	8.0		ロクロ 刷り高台	内：唐草文、 見込五弁花印 刺の目縁きび		灰白色	渡佐良	コンコウ印。 V-1 期 1680 ~ 1740 年代	
	3	陶器	甕	平部 (棒蓋形)	12.1	5.5	3.7		ロクロ 刷り高台	鉄銹 透明釉	外：菊文		明褐色 灰戸、 美濃	膝部線脚状。 1780 ~ 1820 年代	
	4	陶器	皿	丸形 底中	12.6	2.6	7.0		ロクロ 高台貼付	透明釉			灰黄色	新面玉掛状高台。 見込玉目縁3。	
	5	陶器	甕	五合巻利形 尾高巻利形		(18.0)	8.3	11.8	ロクロ 刷り高台	鉄銹、灰銹 高台無釉	肩部沈線5条		灰黄色	瀬戸、 美濃 1670 ~ 1700 年代	
SK 123	6	陶器	磁	一弁巻利形 高田巻利形	内 3.0 外 4.2	21.6	10.4	13.4	ロクロ 刷り高台	灰銹 高台無釉			灰白色	瀬戸、 美濃 18 世紀前後。	
	7	土器	小皿	平形無高台 かわむけ	(7.8)	2.1	4.6		ロクロ 其部左四 転六切り				灰白色	在地高	内面金銀付着 取痕
	8	土器	小皿	平形無高台 かわむけ	(9.5)	2.0	5.6		ロクロ 底部左側 転六切り				灰白色	在地高	内面金銀付着 取痕
	9	陶器 木製品	漆器 漆器	漆器											
SK 129	1	陶器	甕	腰筒形	10.1	6.9	4.9		ロクロ	白濁釉、染付、 乳装、透明釉		灰色	渡佐 見6	V-1 ~ 2 期 1680 ~ 1710 年代	

表 26 出土遺物観察表 (9) 不明遺構・ピット (柱穴)

遺物番号	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	裝飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		絵付・線装	文様			
SK 01	1	石製品	硯	長方形	全面研削。凹部無欠損。 長さ (11.4) 幅 6.35 高さ 1.7 重量 186.3g									18 世紀前半*
SK 02	1	陶器	ミニチュア ア、蓋	楕円 梨斗状	4.3	0.9/ 1.4			ロクロ 滑み貼付	緑釉		乳白色	瀬戸、 美濃	起りなし、左側面高切
	2	土器	取瓶か	実地筒状	(1.2)	5.6	0.7		掬作り			暗褐色	在地高	外面金銀付着。内 面被地で白色化。
	3	石製品	香炉か	楕円 脚付	平面的長方形。側面右側の小型突起。短い脚を器底に造り出す。内外面被地。角閃石安山岩製。 上面長 10.3 下面長 11.0 上面幅 7.9 下面幅 8.4 高さ 5.4 (内径 7.4 × 5.7 × 2.5) 重量 332.8g									
SP 21	1	陶器	甕	管状半筒状。前後合わせ型作り。	灰銹。高さ 4.1 最大径 2.4 最大厚 1.4									
P 22	1	陶器	灯明 受皿	油燈 アノ子状	9.4 受皿 6.0	2.5	4.7		ロクロ、 底部磨削 磨削	鉄銹		に深い 茶褐色		中や丸底 底部磨削被地。
P 45	1	金属 製品	押笄 笄管		両端細線帯。磨き目付。真鍮製。 長さ 7.1 外径径 1.6 接合部径 1.0 重量 8.99g									
P 92	1	金属 製品	押笄 笄口		左端部 (接合部) に叩きつぶされ、断面状に再加工される。 長さ 7.2 接合部径 1.4 喉口外径 0.9/内径 0.25 重量 5.99g									

表 27 出土遺物観察表 (10) 溝 ①

遺物番号	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	裝飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径	最大径		絵付・線装	文様				
SD 03	1	陶器	甕	手筒形 (筒呑茶碗)	4.9	5.95	3.0		ロクロ 刷り高台	染付 呉須、透明釉	外：鳥文、雲文		白色	瀬戸の 明台期	型取型 明台期
	2	磁器	花瓶口	菊花形	2.4	1.0	0.8		型押し	白磁釉	型押し文様		白色	肥前	
	3	陶器	網目地	唐口形	(17.6)	6.0	6.8		ロクロ 無高台	透明釉、緑 銹、其部 貼			灰白色	京、 信濃系	底面磨きカキに「舟」。 19 世紀代

表 28 出土遺物観察表 (11) 簿 ② (瀬戸・美濃と肥前の時期編年は『江戸時代の瀬戸窯』『九州陶磁の編年』に拠る.)

遺蹟名	番号	材質	器種	形状特徴	法数 (cm) (推定)・(現存)			成形	裝飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径		最大径	繪付・染染				文様
SD 03	4	土器	火鉢	台付胴丸形		(18.8)	(22.0)	27.6	繪付・染染 壺形・壺形・ コクロ・ 台形付	壺押し麻紙文様	灰褐色	在地産	内外面施。上部欠損後、輪縁部削り取。上部に輪縁孔1	
SD 06	1	ガラス製品	瓶	ワインボトル風。円筒上げ底。緑青色半透明。 高さ (8.8) 底径 7.2 最大径 8.2 底部高さ 3.05 総径 0.2 ~ 0.5 底厚 0.35										近代。
	2	ガラス製品	瓶	青色。底面上げ底。いかり形。化学薬品瓶。口径外径 2.8 内径 2.0 高さ 20.0 底径 6.7 底部径寸 4.3 最大径 6.9 頂部高さ 4.2 総径 0.2 ~ 0.4										
SD 10 上層	1	磁器	碗	丸形	11.1	6.0	4.8	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：緑内横線2条 見込二重圓縁内 外：朱文書	灰白色	波佐見	底裏銘角内納品屋印。 外高丸文印四角用。高倉 9月。 18世紀代	
	2	磁器	碗	丸形 〔丸筒内面 染付〕	(10.9)	6.2	5.6	コクロ	内：染付 外：青磁釉	内：緑内四方唐文 見込二重圓縁内 五弁花	白色	肥前	底裏銘二重輪内 納品。 1750 ~ 1780年代	
	3	磁器	碗	腰板形 〔小丸形〕	8.4	5.5	3.2	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：緑内横線2条 見込二重圓縁内 寿字朱文 外：竹笠文	白色	肥前	1760 ~ 1810年代 (V ~ V期)	
	4	磁器	碗	丸形 小碗	7.2	3.6	2.6	コクロ 削り高倉	染付 呉須、透明釉	内：緑内横線2条 見込二重圓縁内 高倉納品唐文 外：朱文書	灰白色	波佐見	V期 1690 ~ 1740年代	
	5	磁器	碗	腰板形 〔への字 高台付〕	11.1	6.2	4.2	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：緑内四方唐文 見込二重圓縁内 高倉唐文 外：雲輪文書し。 高倉納品唐文	白色	肥前	1760 ~ 1810年代 (IV ~ V期)	
	6	磁器	碗	広底形 〔広底付〕	11.4	7.0	5.6	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：緑内横線1条 見込圓縁内 折込朱文 外：仙芝朱文	灰白色	波佐見	1820 ~ 1860年代 (V期)	
	7	磁器	仏飯具	台底輪高台	7.0	6.3	4.1	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：朱文書 米書文	白色	肥前	V期 1780 ~ 1850年代	
	8	磁器	戸車	有孔円盤状	直径 8.0	口径 1.7	厚さ 2.2	コクロ	滑車部・縁孔 部に透明釉	内：朱文書 米書文	白色	肥前	V期 1780 ~ 1860年代	
SD 10 上層	9	陶器	片口鉢	口縁切込 丸形	20.2	13.1	11.5	21.4	コクロ 白貼付	内外残部 高倉唐様	黄白～ 褐色色	瀬戸・ 美濃	8小期 18世紀前半～本葉 御門借取 10 本単位。見 込目目三身丈。18世紀 後半～19世紀 前半。	
	10	陶器	楕円鉢	口縁外帯 三段切の 緑内凸帯小	(31.0)	10.7	15.4	(33.6)	コクロ ～夕底	赤褐色 砂粒 多量	褐色色	瀬戸・ 美濃	18世紀後半～19世紀 前半。	
	11	陶器	灯明 受皿	輪縁切立状	9.5	1.3	3.4	コクロ 底面凹形 窪付	鉄釉	上平灰赤。下 半鉄釉唐分付	にぶい 褐色	瀬戸・ 美濃	底面輪縁切。1760 ～ 1860年代	
	12	陶器	仏花箱	瓶口丸形	5.4/ 6.0	11.3	8.0	コクロ 貼付	上平灰赤。下 半鉄釉唐分付	上平灰赤。下 半鉄釉唐分付	褐色色	瀬戸・ 美濃	底面輪縁切。1760 ～ 1860年代	
SD 10 中層	13	土器	火鉢	胴丸形	(24.0)	12.2	(16.6)	(35.4)	コクロ 型押し 三足貼付	壺押し文様。胴部 沈線2条の間の帯 縁と口縁に方唐 文	灰褐色	在地産	外面施。内面施。	
	14	磁器	碗	丸形〔丸筒 青磁染付〕	10.2	4.5	4.0	コクロ 削り高倉	内：染付 呉須、透明釉 外：青磁釉	内：見込五弁花 唐文	灰白色	肥前	底裏銘二重角内 納品。As-A出上。 1750 ~ 1780年代	
	15	磁器	碗	丸形 小碗	7.4	3.7	3.0	コクロ 削り高倉	染付 呉須、透明釉	外：朱文 書	灰白色	波佐見	高倉唐分。V期 1690 ~ 1740年代	
	16	磁器	碗	腰板形	8.3	4.2	4.2	8.5	コクロ 削り高倉	染付 呉須、透明釉	内：若松文 御山唐文	白色	肥前	外面中位施。As-A出上。 1740 ~ 1780年代 上層から混入。1820 ~ 1860年代 (V期)
	17	磁器	碗蓋		9.6	2.6	3.8	コクロ	染付 呉須、透明釉	内：緑内四方唐文 見込二重圓縁内 唐状松竹梅 外：敷唐唐文	白色	肥前		
	18	陶器	碗	腰板形 〔せんにじ編〕	(9.0)	5.0	4.2	コクロ 削り高倉	内外残部・灰 軸左右唐分付。 唐行無釉	内外残部・灰 軸左右唐分付。 唐行無釉	褐色色	瀬戸・ 美濃	8小期 (産前) 18世紀中葉～本葉	
	19	陶器	片口鉢	口縁切込 丸形 小型	(13.0)	6.1 ～ 0.5	(6.0)	コクロ 削り高倉	内外残部 膝下無釉	内外残部 膝下無釉	黄白色～ 灰褐色	瀬戸・ 美濃	見込ピン輪。胴部 込目唐分付。As-A出上。 18世紀後半	
	20	陶器	皿	輪花形	6.5	1.8	3.4	壺押し	脚部并縁 唐行無釉	脚部并縁 唐行無釉	灰褐色	瀬戸・ 美濃	9弁先唐切込 (幅6)	
	21	陶器	カンテラ	片口後半形	4.9	(4.7)	5.4	(9.0)	コクロ。 削り高倉。口部 貼付	内外透明釉 高倉唐様	内外透明釉 高倉唐様	褐色色	京・ 信濃	上層からの混入。 口部欠損。 19世紀前半～中葉
	22	陶器	楕円鉢	口縁外帯 二段。浅め。 緑内凸帯小	(32.8)	12.0	(14.0)	(38.9)	コクロ			赤褐色～ 暗赤褐色	瀬戸・ 美濃	御門借取 8 本単位。見 込目唐分付。As-A出上。 18世紀後半
	23	土製品	俵	彫形 中空	高さ (11.2)	幅 (4.2)	奥行 (3.5)		削成型合 せ、ナデ			明赤褐色	在地産	高倉唐分。本末は 高倉唐分。
	SD 10 下層	24	磁器	碗	丸形	10.1	5.5	4.1	コクロ 削り高倉	染付 呉須、透明釉	外：雲輪松竹梅文	乳白色	肥前	高倉方形状。底裏 高倉唐分納品。 18世紀代。
		25	磁器	碗	丸形	9.5	5.2	4.0	コクロ 削り高倉	染付 呉須、透明釉	外：雲輪松竹梅文	白色	肥前	底裏銘二重角内納品。 IV期

表 29 出土遺物観察表 (12) 溝 ③

遺構名	番号	材質	器種	形状特徴	法長 (cm) (測定)・(奥寸)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		絵付・繪畫	文様			
SD 10 下層	26	磁器	碗	丸形	9.8	5.5	4.3		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：雪輪草花文	灰白色	波佐見	くわかんか手、底裏絵柄し 大明草紙。1680～1770 年代 (V期)
	27	磁器	碗	丸形	9.8	5.35	3.9		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：雪輪草花文	灰白色	波佐見	くわかんか手、底裏絵柄 し手。1680～1770年代 (V-1・2期)
	28	磁器	碗	丸形	9.4	4.98	3.7		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：雪輪草花文	灰白色	波佐見	くわかんか手、底裏絵柄し 大明草紙。1680～1770 年代 (V期)
	29	磁器	碗	丸形	(10.0)	3.35	4.2		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：印刷模文4	明黄灰色	波佐見	高台砂目。1680～1770 年代 (V期)
	30	磁器	碗	丸形	(8.8)	4.45	3.6		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：草花文	明黄灰色	波佐見	高台砂目。1680～1770 年代 (V期)
	31	磁器	碗	丸形	7.3	4.2	2.8		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：雨降文	灰白色	肥前	高台断面三角状、高台 砂目。IV期 1690～1790 年代
	32	磁器	碗	丸形	7.7	4.1	3.0		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：草花文	灰白色	波佐見	高台断面三角状、 1680～1770年代 (V-1・2期)
	33	磁器	碗	佛形 湯下	11.4	3.95	3.8		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	内：縁内四方印文 見込二重線内 玉弁花印柄 外：竹居に花文	白色	肥前	高台断面三角状、 1680～1770年代 (IV期)
	34	磁器	碗	平筒形	8.3	6.3	4.2	8.9	ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	内：縁内四方印文 見込二重線内 扇状の印柄 外：唐草文、流麗 高台扇形印柄	白色	肥前	1740～1780年代 (IV期)
	35	磁器	碗	平形 見込地の目 輪割ぎ	8.6	3.4	3.4		ロクロ 削り高台	色絵、上絵 透明釉	内：松竹梅文、 見込みの目輪 割ぎ扇形印柄	白色	肥前	18世紀代。
SD 10 下層	36	磁器	皿	天形 見込地の目 輪割ぎ	(12.8)	2.8	(7.8)		ロクロ 削り高台	色絵、上絵 透明釉	内：梅樹文、 見込みの目輪 割ぎ扇形印柄	白色	肥前	18世紀代。
	37	磁器	皿	天形 五寸蓋	13.5	3.6	7.6		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	内：平梅花文、二 重線内五弁花 外：唐草文	白色	波佐見	底裏一重線内刷し清 紙。高台砂目。 1750～1780年代 (V-2・3期)
	38	磁器	皿	楕円形 輪反形 深皿	13.7	4.56	7.5	14.0	ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	内：流麗草文、 松竹梅文、見込 二重線内五弁花 外：唐草文	白色	波佐見	底裏一重線内刷し清 紙。高台砂目。 1680～1780年代 (V-1・2期)
	39	磁器	碗蓋	楕円 型手状	6.4	(2.3)	—	7.6	ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉	外：花雪草文	灰白色	肥前	IV期 1690～1780年代 SK 44と接合
	40	磁器	仏具 台鉢輪高台		7.5	5.2～ 5.85	3.9		ロクロ 削り高台	染付 真紙、透明釉		灰白色	肥前	IV期 1690～1780年代
	41	磁器	仏具 双耳立鉢形	—	(14.3)	8.6	10.6		ロクロ 削り高台	染付、真紙、 白泥、透明釉	外：草書文 松文	灰白色	波佐見	底彫草花 (径4.5) 境、新 島草紙。榎木彫に転用。 SK 109と接合
	42	陶器	碗	楕円形	8.9	4.85 ～5.3	4.2		ロクロ 削り高台	内外赤釉 裏下黒釉		黄白色	瀬戸・ 美濃	釜・ 土器
	43	陶器	碗 [脚車輪]	圓形	9.1	6.0	4.5		ロクロ 削り高台	黄泥絵、透明釉、 高台丸形脚	外：山水文刷し	灰白色	瀬戸・ 美濃	京焼風陶器
	44	陶器	碗	楕円形 [脚車輪]	8.7	5.7	4.2		ロクロ 削り高台	透明釉 高台丸形脚	外：龍崗山水文	黄白色	肥前	京焼風陶器。底裏刷 し。高台砂目。同銘 1650～1740年代
	45	陶器	碗	圓形 [見込手輪]	(11.3)	7.1	3.9		ロクロ 削り高台	透明釉 染付		淡黄色	肥前	同～IV期 1650～1740年代
SD 10 下層	46	陶器	碗	圓形 [脚車輪]	9.6	5.95	4.6		ロクロ 削り高台	透明釉 灰釉、 外：鉄絵	内～外面上下： 刷し底彫3条	黄白色	瀬戸・ 美濃	第2小層 18世紀中葉
	47	陶器	碗	半球形	9.0	5.3	3.1	9.8	ロクロ 削り高台	鉄絵、灰滑 高台無釉	外：不明文高文	黄白色	京・ 加賀	18世紀前半～後葉
	48	陶器	碗	楕円形 [せじ丸]	9.9	5.3	4.3	10.3	ロクロ 削り高台	灰釉、鉄絵左 右滑分子、 裏付輪取		黄白色	瀬戸・ 美濃	第7小層 18世紀中葉
	49	陶器	碗	楕円形 [せじ丸]	(9.6)	5.0	3.5	(10.0)	ロクロ 削り高台	鉄絵、白泥、灰 釉、高台無釉	外：唐文	灰色～ 淡黄色	京・ 信楽	18世紀中葉
	50	陶器	碗	半筒形 [脚手茶碗]	8.3	6.13	3.3		ロクロ 削り高台	内～外面上半： 黒鉄釉、 外：鉄絵、 付輪取	外：蓮手蓮輪刺 突	灰色	瀬戸・ 美濃	第8小層 18世紀後半～A-A 層下層
	51	陶器	碗	楕円形 [尾舌茶碗]	(11.2)	7.6	6.0		ロクロ 削り高台	灰釉、口縁下 輪取し、器下 無釉		黄白色	瀬戸・ 美濃	第9小層 18世紀前半
	52	陶器	碗	楕円形 陽射染付	10.7	7.08	4.9		ロクロ 削り高台	染付、真紙、 白泥、透明 釉	外：唐草文	灰色 砂粒多量	波佐見・ 平戸	見付鉄絵。 1690～1750年代
	53	陶器	碗	平筒形 小片	7.1	3.03	3.03		ロクロ 削り高台	内外鉄釉 器下無釉		黄白色	瀬戸・ 美濃	18世紀代 (A-A層底面)

表 30 出土遺物観察表 (13) 薄① (瀬戸・美濃と肥前の時期編年は『江戸時代の瀬戸窯』『九州陶磁の編年』に拠る.)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	寸量 (cm) (規定)・(保存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期
					口径	器高	底径	最大径		繪付・繪莖	文様			
SD 10 下層	55	陶器	皿	丸形・底穴 (浅茶)	11.4	4.1	4.0		ロクロ 削り高台	黒染、透明釉 高台周りに無釉	内：見込み黄文	黄白色	瀬戸・美濃	1740～1800年代e
	56	陶器	皿	丸形・底穴 見込丸の目 縁割き皿	(13.7)	3.5	4.06		ロクロ 削り高台	内：黒染無 外：透明釉 裾下無釉		灰色	肥前	見込丸の目縁割き。 IV期 1690～1780年代
	57	陶器	皿	丸形・底中 見込丸の目 縁割き皿	(19.0)	4.56	7.4		ロクロ 削り高台	内：白染、鉄釉 外：鉄釉 高台周りに無釉	内：白泥黒毛目	灰色 砂粒 多い	肥前	見込丸の目縁割き。 IV期 1690～1780年代
	58	陶器	皿	菊花形 「菊皿」	(14.2)	3.5	(7.0)		ロクロ、 窯押し、 へう割 削り高台	内外両面 高台無釉	内：菊花文 外：菊花文	淡黄色	瀬戸・美濃	第2～3小期 1630～1670年代d
	59	陶器	皿	木皿形	10.0/ (14.4)	3.1	4.9		窯押し 削り高台	内外両面 高台無釉		灰白色	瀬戸・美濃	
	60	陶器	鉢	浅丸形 「三島半鉢」	21.9	(3.4)	—		ロクロ	白泥 染、透明釉	内：三島半文様 魚鱗	暗赤色	肥前	17世紀後半～18世紀 中盤a (III～IV期)
	61	陶器	鉢	浅丸形 折縁形	(27.0)	(7.3)	12.4		ロクロ 削り高台	白泥、鉄釉 透明釉	内：襷巾手	赤褐色 佐器質	肥前 唐津系	見込み丸の目縁割き 縁部厚肉。高台側面に 浅形時刻突。4。 18世紀中盤～後半a
	62	陶器	片口鉢	丸形	18.2	10.42	9.2	18.76	ロクロ 削り高台	灰釉 高台無釉		淡黄緑	瀬戸・美濃	第2～3小期 1690～1720年代
	63	陶器	片口鉢	丸形	—	(7.3)	8.8		ロクロ 削り高台	透明釉 高台周りに無釉		淡黄緑	瀬戸・美濃	見込目縁3、底穴 深7「口」191 第7小期 18世紀中盤
	64	陶器	皿	尾島徳利形 五合徳利形	—	(18.8)	7.9	10.7	ロクロ 削り高台	鉄釉 陰線成し		にぶい 黄	瀬戸・美濃	尾島欠損部厚肉。 1690～1700年代b
65	陶器	椀鉢	口縁玉縁形	26.2	10.1	10.5	27.0	ロクロ 削り高台	鉄釉		黄白色	瀬戸・美濃	器口15本単位。第6 小期 (前) 18世紀初頭	
66	陶器	椀鉢	口縁外帯 三段、浅め、 縁内白帯小	(30.5)	12.0	(14.7)	(31.7)	ロクロ	鉄釉		赤褐色	肥前・唐津系	器口15本単位。 見込目縁。	
67	陶器	灯明皿	半円筒形	7.5	1.5 ～1.8	3.5		ロクロ	灰釉、体部外 面下手無釉		にぶい 黄	瀬戸・美濃	1680～1730年代a (第5～6小期)	
68	陶器	灯明皿	半円筒形 底穴深め	10.2	2.2	4.8		ロクロ	灰釉、体部外 面下手無釉		灰褐色	瀬戸・美濃	見込目縁。 第6小期 18世紀初頭	
69	陶器	灯明皿	半円、底穴深め、 体部浅	8.2	1.45 ～1.8	4.0		ロクロ、 底部七割 削り高台	鉄釉		赤褐色			
70	陶器	灯明受皿	油漬アーチ状	5.7	2.18	3.8	8.83	ロクロ、 底部同軸 造形	鉄釉		明赤褐色	志戸呂	内外両面油漬付着。	
71	陶器	灯明受皿	油漬アーチ状	5.9	2.65	4.5	9.45	ロクロ、 底部同軸 造形	鉄釉		明赤褐色	志戸呂		
72	陶器	観音	茶托形 天目台形	(2.0 ～2.3)	(2.3)	4.4	7.1	ロクロ	鉄釉 髹付無釉		淡黄色	瀬戸・美濃		
73	陶器	香炉	腰栗葉形	12.0	8.96	7.0	12.5	ロクロ 削り高台	染付、黄須、 白泥、透明釉。 内面、高台無釉	外：紫文 貫入目立つ	淡黄色	肥前	陶器胎付。口唇部縁割 き、幅広高台。	
74	陶器	香炉	半筒形 有三角	11.6	5.6 ～6.2	7.9		ロクロ 三足胎付	灰釉、内面 染付、裾下無釉	胴部底穴状浅線 8～9筋	淡黄色	瀬戸・美濃	赤み。内面深、SK製と 縁合。第6小期 18世紀初頭	
75	陶器	香炉	半筒形 有三角	(8.2)	4.48 ～5.5			ロクロ 三足胎付	鉄釉、赤面 深染付、底部 無釉	外：紫の羽文 帯状	灰白 淡黄色	瀬戸・美濃		
76	陶器	箱内形 容器	輪高台	(8.9)	5.7	(4.4)		ロクロ 削り高台	鉄釉、透明釉 高台無釉	内：横線1条	灰色	京・信楽系	18世紀代	
77	陶器	壺	平胴形	(19.6)	20.2	11.8		ロクロ 削り高台	口縁内～外面 ～底面赤染	胴部外面上平に 横線1条多数		褐色		志願割青「乙」も。 内面ロクロ目縁割 き(φ5.5/8mm)
78	土器	カワ ラケ	平底、深め 口縁直下に 内耳	(10.0)	2.1 ～2.3	5.0		ロクロ、 底部左側 軸糸染付			淡黄緑	在地系	外面染付付着。腰部が丸 く立ち上がる。	
79	土器	カワ ラケ	鐘状 厚手	9.2	1.83 ～2.05	6.6		ロクロ、 底部左側 軸糸染付			にぶい 黄褐色	在地系	外面染付付着。腰部が丸 く立ち上がる。	
80	土器	内耳 土器	平底、深め 口縁直下に 内耳	(35.8)	7.8	(27.0)		ロクロ 内耳胎付			にぶい 黄褐色	在地系	内外両面胎付。 16世紀～17世紀前半。	
81	土器	埴輪	平底、浅め 体部～底部に 内耳	(38.6)	5.45	(35.4)		ロクロ、 体部下平 指頭内内 耳胎付			淡黄、 暗褐色	在地系	外面胎付着。 SD 10 下層 No.1 および SK 111 と縁合	
82	土器	埴輪	口縁割破片	(36.0)	—	—		ロクロ			灰白色	在地系	外面深。袖形孔に縁線 (φ5.5/8mm)	
83	土器	土壺	胴筒形 半胎付	15.1	(20.3)	—	23.7	ロクロ、 外輪下方 キ形			黒褐色 外面 灰色	在地系	突起状把手。胴部内面 深。SD 13 と縁合。	

表 31 出土遺物観察表 (14) 溝⑤ (瀬戸・美濃と肥前の時期福年は「江戸時代の瀬戸家」『九州陶磁の編年』に拠る.)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	寸法 (cm) (推定)・(現存)				成形	裝飾		出土	所在地	備考・時期
					口徑	器高	底徑	最大径		捺付・施垂	文様			
SD10 下層	85	土器	瓦葺 車	上部筒 長方形	—	(22.3)	(21.8)		紐作り コケロ型 形		黒色/ 灰白色	在地帯	上面受皿状、 内外面黒色陶土。	
	86	土器	煎用 用瓦	筒状 透孔・有 耳	18.8	8.3	(15.0)	17.8	ロコロ		灰白色	在地帯	長方形・花二角形取柄。 口縁玉縁状。	
	87	土器	七輪 五形	筒状、朝顔形 口縁内面 半月状状	(14.6)	6.4	(11.0)		ロコロ		灰白色	在地帯	口縁平直。裏底灰下。 取柄下と接合。	
	88	土製品	陸人形	中身、土師 女児坐像	高さ (4.5) 最大径 4.8 奥行 4.9 底面小孔径 0.5				前後型合 せ	顔彩、洞落	に似た 黄褐色	在地帯	底部小孔。	
	89	瓦	瓦葺		径 33.0 幅 9.3 ~ 13.8 高 さ (33.0) 厚さ 1.7 ~ 2.1 重量 3820g				右側一部欠存。製作時、裏面に 側面に 貫通孔 (φ 5~1.7mm) 多数。				SK 69 と接合。	
	90	瓦	軒丸瓦		長さ (29.5) 幅 (12.0) 内径 (7.5) 重量 3.0 厚さ 2.0				瓦当部欠損、内面有目紋。玉縁内面取柄、裏底面取り後ナデ、 両面玉縁状。外面施瓦ナデ。胴部に僅 1.5cm 小孔 1。					
	91	石製品	硯	長方形 長方形	陸部欠損。金剛研削。砂目粗。92 と同程度。 長さ (6.9) 幅 6.6 高さ 2.4 重量 (海) 部内高 1.3 陸部内高 0.38 磁層厚 0.42 重量 147g									
	92	石製品	硯	長方形 長方形	陸部欠損。金剛研削。砂目粗。91 と同程度。 長さ (4.1) 幅 6.0 高さ 2.4 重量 (海) 部内高 1.35 磁層厚 0.42 重量 86.4g									
	93	石製品	石臼	水車口 上臼	横長片状。胴部 19.4。下胴部 (36.5) 高さ 28.7 径み深さ 3.8 底径 5.2 ~ 6.8 毛の 配り幅 (5.5) 5~6ヶ所 (2.8) 噴孔径 4.7 重量 196g									
	94	金属 製品	煙管 吸口		長さ 6.45 煙口径 0.4 接合部径 0.75 重量 4.7g									
95	銭貨	銅銭	銅銭	直径 17 枚。すべて泉永通宝「皇字」刻。背面上に足尾山山形を表す「尾」。造付次第良好。 下層中北沢村出土。									寛永 2 (1742) 年 ~ 享和 4 (1747) 年 御造	
SD10 中下層	98	磁器	碗	丸形	10.2	8.2	4.06		ロコロ 削り高台	捺付 貝類、透明釉	外：管輪草花文	灰白色	肥前見	
	97	磁器	碗	丸形	9.3	5.96	3.7		ロコロ 削り高台	捺付 貝類、透明釉	外：印竹筒粉文	白色	肥前	1600 ~ 1740 年代 (IV 期)
	98	磁器	砂鉢	有足 半圆形 輪高台	(13.9)	7.5	5.0		ロコロ。 三足貼付 削り高台	内：加納 外：青磁釉 高台無飾	外：彫刻加納文	灰白色	肥前見	IV 期 1850 ~ 1080 年代
	99	陶器	皿	丸形 底底	(19.7)	3.82	10.0		ロコロ 削り高台	鉄銹、鉄灰掛 高台内・捺付 無飾	内：積文文、積 染	灰色	瀬戸・ 美濃	1670 ~ 1770 年代 (1700 年前後)
	100	陶器	皿	扇反形 「志野丸皿」	11.3	1.95	6.8		ロコロ 削り高台	長石南 高台内輪状取		灰白 ~ 淡灰色	瀬戸・ 美濃	体部様 2 枚。見込ビン解 3、 第 3 小房 1650 ~ 1670 年代
	101	陶器	皿	椀形。見込 口の丸輪状	12.8	3.75	4.5		ロコロ 削り高台	透明釉。内面 放射状削り取 高台無飾	外：高台型内に 放射状削り取	灰白色	肥前	見込砂目付。重層 1650 ~ 1690 年代
	102	陶器	横鉢	わづらひに丸底	—	—	(16.0)		銀作り 押瓦葺	自然釉		明灰緑 長石多	丹波	胴部前縁 9 本取付。 見込横目丸に丸。 1650 ~ 1720 年代
	103	所屬	横鉢	口縁外帯 三珠、溜り、 縁内帯小 横状横溝	(37.1)	14.3	(16.4)		ロコロ			赤帯 ~ 暗赤色	瀬戸・ 美濃	胴部前縁 10 本取付。 見込横目丸。18 世紀後。 見込横目丸。
	104	陶器	灯明鉢	手形筒状 横状横溝	10.1	2.4 厚 2.75	4.7		ロコロ 耳貼付	灰白 腰下無飾		淡黄色	瀬戸・ 美濃	見込ビン解 3、第 5 小 房 1690 ~ 1690 年代
	105	陶器	製水入	長筒円形 や平筒形	10.1 7.6	4.5 4.5	11.6 4.5		板 (タテ ラ) 作り	灰緑、黄赤赤 赤。底面無飾、 墨書	外：七宝文、拵 輪	灰色	瀬戸・ 美濃	底面墨書「元禄十有 (1701) 年 己七月廿日か へ申候 清平」
106	陶器	ミニ チュア	丸底靴形 立敷形	—	(24.5)	2.2	4.06 2.5	ロコロ	洞落片付、底 面無飾、墨書		灰白色	瀬戸・ 美濃	底面墨書「口コ」	
107	土器	塔形		—	—	—					灰白色	在地帯	底面施赤丸に家跡 (φ 0.7~0.9mm)	
108	土器	流摺壺 蓋	流摺形壺 口受け有	6.5 ~ 7.0	—	1.1	8.1	泥作り			灰黄色	泉州帯	1670 ~ 1730 年代	
109	石製品	硯	扇反長方形 長方形	圓底 (海) 陸欠損。磁器使用による硝子痕跡。硯底 (底面) に彫刻釘文字・墨記。粘板赤釉。 長さ (13.0) 幅 5.4 高さ 1.4 底縁内高 0.45 ~ 0.6 重量 171.9g										
110	石製品	五輪帯 型取輪		やや扁平。空物丸端部欠損。風輪下面に突起。被蝕。安山岩質。 高さ (25.2) 重量最大径 14.5/16.7 風輪下面高 (9.5) 重量 6000g										
111	金属 製品	摩訶 摩訶		長さ 31.5mm 高さ 1.4 接合部径 0.95 重量 11.0g										
112	磨治前 産物	鉄片	塊状形	a: 一部磨削。砂粒・炭化物多量含有。長さ 13.2 幅 10.0 高さ 5.7 重量 573.9g b: 砂粒・炭化物多量含有。長さ 10.7 幅 10.2 高さ 4.1 重量 414.7g c: 砂粒・炭化物多量含有。長さ 8.5 幅 7.6 高さ 4.8 重量 251.3g										
SD11	1	磁器	碗	浅平球形 (平底碗)	9.1	4.2	3.55		ロコロ 削り高台	内：黄赤赤 外：二重刷目文	灰白色	肥前	1710 ~ 1780 年代 (IV 期)	
	2	磁器	碗	丸形	7.2	4.4	3.13		ロコロ 削り高台	捺付 貝類、透明釉	外：藍文	灰白色	肥前	IV 期 1690 ~ 1780 年代
	3	陶器	皿	折縁形 (笠取鉢)	(33.2)	9.0	(16.4)		ロコロ 削り高台	灰緑 灰白	内：秋草龍文 外：秋草龍文	灰白色	瀬戸・ 美濃	新島鉢。17 世紀後葉 ~ 18 世紀前期
SD13	1	磁器	鉢蓋	短丸 梨半状	13.3	2.4/ 3.4	1.1 1.8		ロコロ	捺付 貝類、透明釉	外：梅樹文ほか	白色	肥前	IV 期 1680 ~ 1780 年代
	2	瓦	板瓦		16 号形瓦当を連続捺付。小孔 2。 長さ (19.4) 幅 29.6 径 1.5 ~ 2.0 瓦当外径 11.0							灰色	瀬戸川に再利合。 SK 64・79 と接合。	
	3	石製品	流摺壺	流摺形、貫流孔	球形。玉縁状。径 1.05 径 1.57 径 3.6 重量 8.37g								SD13 No. 1	

表 32 出土遺物観察表 (15) 溝⑥ (瀬戸・美濃と肥前の時期隔年は「江戸時代の瀬戸瓦」「九州陶磁の福年」に拠る.)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径	最大径		捺付・捺染	文様				
SD17	1	石製品	砥石	楕円状	4面磨削, 軽石製. 長さ6.8 幅3.5 厚さ2.4 重量33.6g										
SD20	1	陶器	皿	丸形 底広	20.7	3.9	11.9		コクロ 底面ハ 1	染付 呉紙, 透明釉	内: 透文瓦面, 花文, 足込指箱 外: 唐草文, 高台燒三重圓腹	白色	肥前	底面銘「成化年製」 IV期 1690 ~ 1780 年代 SK 38 下段と適合。	
	2	陶器	皿	浅丸形 底広	(12.7)	4.8	4.9		コクロ 割り高台	透明釉 鉄絵 高台無釉	内: 襷山木文文 外: 高台内門裏 割線(木下洗)	黄白色	肥前	京極陶器館 1690 ~ 18世紀初頭 (IV期)	
	3	陶器	香炉	無足 靴履半筒形	11.1	6.5	5.5		コクロ 割り高台	透明釉, 鉄絵 呉紙, 高台無 釉	外: 枝文	灰白色	京・ 信濃系	高台ナド付者	
	4	陶器	灯明 受皿	油清 アーチ形	12.1 受7.7	2.5	6.3		コクロ	鉄繪		赤褐色	志戸瓦		
	5	金属 製品	火箸		先端欠損, 鉄製, 細部腐蝕。断面は断面方形。体部は断面略円形。 長さ(19.7) 断面外径1.03/内径0.6 体部径0.4 ~ 0.6 重量21.5g										
SD22	1	陶器	碗	呉器形 (鉄器手取)	10.1	7.0	4.3		コクロ	透明釉		黄白色	肥前	1690 ~ 18世紀前半 (IV期)	
	2	陶器	碗	丸形 (尾馬手取)	10.2	6.26	4.4		コクロ 割り高台	鉄絵, 辰絵施 し, 高台無釉		黄白色	瀬戸・ 美濃	1680 ~ 1730年代 (第5~6小期)	
	3	石製品	玉輪帯	火輪	最大幅(17.6) 高さ(13.6) 重量2462g										

表 33 出土遺物観察表 (16) 埋桶遺構(SJ)/ 焼土・炉(SL)/ 井戸(SE)/ 礎石(SS)/ 墓坑(ST)

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (推定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	備考・時期	
					口径	器高	底径	最大径		捺付・捺染	文様				
SJ06	1	陶器	碗	半球形	10.9	5.5	4.1		コクロ 割り高台	白濁釉, 辰絵 灰塗, 高台無 釉	白梅紅文	灰~ 淡黄色	京・ 信濃系	18世紀中葉~後葉	
	2	陶器	土瓶蓋		11.0	(3.3)	上面 径(3.3)		コクロ 筒形折蓋 し	外: 青色海鼠 絵, 口縁鉄 繪		黄灰色 砂灰 多染	松岡	開口欠損。19世紀初頭 以降を, 混入。SK 11・ 12と適合。	
SJ07	1	土製品	人形	丸 形 胎土 色 赤	(6.3)	横2.1 縦1.9	最大径 3.4		前後型合 せ 拵ナド	外: 透明釉 墨繪		黄白色 鉄赤 陶質	京焼系	断面穿孔。中葉。SK 18 世紀末葉 ~ 19世紀代	
	2	金属 製品	銅線	線り前, 断面腐蝕。 長さ(6.1) 直径0.8mm 重量0.49g											
SJ09	1	陶器	碗	梨形 [せんに七線]	9.1	6.55	3.2		コクロ 割り高台	呉器形, 鉄絵 灰塗, 高台無釉	外: 墨彩, 墨 彩	淡黄色	京・ 信濃系	断面は3線3条。 18世紀中葉~後葉	
	2	陶器	小水注	梨形 肩無し	(9.3)	9.45	7.0		コクロ, 手取付, 高台	鉄絵, 御洗弁桶 受付・底面無 釉	外: 半菊文, 墨繪	灰白~ 淡黄色	瀬戸・ 美濃	高台雷雲「乃井」。 1750 ~ 1770年代	
SL02	1	礎石	環	呉器形 (6.8)	4.75	2.8			コクロ	捺付 呉紙, 透明釉	内: 線内圓線2条 外: 唐草, 幾何 文	白色	肥前	19世紀中葉	
	3	陶器	皿	片口形 浅形	7.4 ~ 7.7	1.68 4.0 ~ 4.2			壓型押し	染付 呉紙, 透明釉	内: 草花文 外: 路頭波瀾文	白色	肥前	19世紀中葉	
	3	陶器	障子口	楕円形	4.2	1.9	4.0		コクロ 横溝貼付	透明釉 底面無釉		にぎい 焼	瀬戸・ 美濃	19世紀中葉	
SE03	1	陶器	瓶	尾馬形 三合樽形	—	(20.1)	7.6	11.2	コクロ 割り高台	鉄絵 灰塗施し	1線は3線3条	灰白色	瀬戸・ 美濃	口縁欠損, 外面埋付者。 1690 ~ 1750年代 内面に鉄絵, 外面黒墨。 外面埋付者。 1710 ~ 1750年代	
	2	陶器	瓶	撰形, 口縁 断面T字状 二合半地	4.3/ 2.6	18.6	6.2	8.8	コクロ 口縁施 し 割り高台	透明釉		灰白 色	瀬戸・ 美濃		
	3	土器	施度 蓋	深桶形 口受	8.0/ 6.3	2.0	上面 径 8.1	8.4	縦作 内面半田				褐色	泉州系	施度, 埋付者。埋付者。 18世紀前半
	4	瓦	瓦		内面: 韮山前, ナテ。断面面取り後ナテ。外面: 截ナテ。 長さ29.9 末径長3.0 小口長2.9 内径10.6 最大幅14.5 厚さ2.0 高さ7.5 ~ 7.9										
SJ06	1	金属 製品	浮管 様蓋		銅製。長さ6.4 火鼠径1.35 重量5.33g										
SS02	1	陶器	磁鉢	口縁外寄 三波状の 縁内凸部小 形	(30.5)	11.4	(12.9)	(31.2)	コクロ 外寄下通 短筒形一 底。			赤褐色	瀬戸・ 美濃	断面径12cm単位。 見込縁18。 19世紀代。	
	2	石製品	火鉢	断面凸部小 箱状	鉄製。四角脚付。角内石安山石製。SK 115から同一個体出土。 長さ(19.7) 幅(14.0) 高さ(12.8) 底径6.5 底面厚さ3.4 脚高さ2.9 重量1690g										
ST01	1	鉄製品	釘		断面正方形, 頭部縮れ。長さ6.6 底径0.1 ~ 0.4 重量2.79g									焼用	
	2	釘	頭部釘		断面長方形, 先端欠損。長さ(2.2) 頭部径(1.1) 厚さ(0.1) ~ 0.4 重量2.84g									焼用	
	3	釘	頭部釘		断面長方形, 両端欠損。長さ(5.1) 頭部径(0.7) 上部厚さ0.4 ~ 0.5 重量4.08g									焼用	
	4	釘	頭部釘		断面長方形, 先端欠損。長さ(4.2) 頭部径(0.63) 厚さ0.2 × 0.28 重量1.15g									焼用	
	5	不明			海板巻折曲(1)で付合中。断面は断面略円形。先端欠損。 長さ(4.43) 断面直径1.0 幅(0.4) ~ 0.5 厚さ0.14 ~ 0.28 重量3.18g										
	6	釘	頭部釘		断面正方形, 先端欠損。長さ(2.3) 頭部径(0.6) 厚さ0.18 重量0.30g										焼用

表 34 出土遺物観察表 (17) 遺構外出土遺物 (瀬戸・美濃と肥前の時期編年は「江戸時代の瀬戸窯」九州陶磁の編年」に拠る。)

遺構名	番号	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) (測定)・(現存)				成形	装飾		胎土	産地	編年・時期
					口径	器高	底径	最大径		絵付・模索	文様			
遺構外 出土 遺物	1	磁器	碗	端反形	11.4	6.4	4.3	ロクロ 削り高台	絵付 引須、透明釉	内：線内縦線2条 見込梵文文 外：東海海浜風景 文、横線	白色	肥前	近代前期、1810～ 19世紀中期	
	2	磁器	碗	端反形	10.2	5.8	3.6	ロクロ 削り高台	絵付 引須、透明釉	内：線内四方印状 文、見込線内方 字刷し、外：雲文	白色	肥前	近代前期、純徳、底頁白 文字、1810～ 19世紀中期	
	3	磁器	碗	端反形	10.5	6.12	4.0	ロクロ	絵付 引須、透明釉	内：線内格子文 見込線内格子 文、外：雲文	灰白色	佐佐見	寛土、V-1期 1820～1880年代	
	4	磁器	碗	端反形	8.2	4.23	3.3	ロクロ	絵付 引須、透明釉	内：線内縦線 見込線内不明文 外：赤文	白色	瀬戸・ 美濃	近代前期、 19世紀中期	
	5	磁器	碗蓋		8.1	2.68	柄み 径 3.6	ロクロ	絵付 引須、透明釉	内：線内四方印文 見込二重線 内院状絵付 外：横線	白色	肥前	1820～1860年代 (V期)	
	6	磁器	碗	半球形	(10.4)	5.18	4.4	ロクロ 削り高台	絵付 引須、透明釉	絵付、上繪 見込内事草文 外：菊文、横文 蓋内草花文	白色	肥前	寛土、 「富倉長春」 1740～1770年代	
	7	磁器	小杯	端反形	6.7	4.2	3.4	ロクロ	絵付、コバルト 透明釉、赤付、 高内内無繪	外：草花文、 詩文 「花御色色図」	白色		近代前期、高台内割ざ状、 底面渦状形痕	
	8	磁器	小杯	端反形 平筒形 胴部10内形	6.3	(4.0)	(3.4)	ロクロ	絵付 引須、透明釉	外：横線文、藤 草文、孤草、蓮 窓、茶室文字、 詩文等	白色	瀬戸・ 美濃	寛土、「富源」等、1800 年代以降	
	9	磁器	小杯	端反形 丸形	6.15	3.5	2.9	ロクロ	絵付 引須、透明釉	内：見込梅花の 隅りに透み	灰白色		近代前期、	
	10	磁器	小杯	丸形 仰形底	6.15	3.7	2.7	ロクロ	絵付、コバルト 透明釉	外：菊、蓮草文、 横線	白色		寛土、 底裏「与二造」	
	11	磁器	小杯	丸形 仰形底	—	—	(3.3)	ロクロ	絵付(赤・紺) 上繪 透明釉	外：筋文、「寛政 奉安殿建誓記念 口和九年五月」	白色		寛土、東校一高橋市立東 幸堂小学校「与町所在 一六三四年一」	
	12	磁器	高杯 新納	腰斬半筒形	—	—	3.0	ロクロ			白色	美濃	寛土能楽番子、角内 「水盆」、「成三」	
遺構外 出土 遺物	13	磁器	皿	蛇の目鉢高 台切形高台	13.8	3.6	8.5	ロクロ 削り高台	絵付 引須、透明釉	内：竹文、草花 文、見込内草 花文、外：草文	白色	肥前	近代前期、 1810～1860年代 (V期)	
	14	磁器	皿	変形長方形 縁花形	(14.3)	2.7	(15.4)	ロクロ 削り高台	絵付、コバルト 透明釉	内：草志風流 内内「口白」	白色		見込から底裏方向に縦 打穿孔(φ0.45-0.6)後 に透明釉・赤絵、高台断 面凸状。	
	15	磁器	戸車		底径3.7～3.8 孔径1.04 底さ0.7			ロクロ	滑車部内縁輪 乳内無繪		白色			
	16	磁器	器物		軸部ホコ形細線部、蓋部、 外周赤色顔料部無繪、型 打ち成形、胎土白色、 貯金箱。	軸径6.0 残存高6.9 残存幅4.7								
	17	陶器	皿	竹縁形 見込蛇の目 縁蓋ぎ型	13.4	3.1	5.9	ロクロ	灰釉 脚下部無繪		黄白色	瀬戸・ 美濃	19世紀中期～後期	
	18	陶器	土瓶 蓋	茶室形、鉄輪 糸目土瓶	(9.0)	2.43	6.6	ロクロ、 積み、 廻り廻付	外周赤釉 内面無繪	外：煎茶袋 湯注袋	黄白色	瀬戸・ 美濃	見込み刷目、角内内 「駄川」	
	19	陶器	灯明 受皿	寄附立立形 曲線半月状	5.6	3.8	4.4	ロクロ	内外透明釉 底面無繪		灰白色	京・ 尾道	19世紀中期～後期	
	20	陶器	マグ カップ	右側把手	10.8	8.18	6.9	ロクロ		絵付(金、青、 横線等)、イン ダグ(D)、透 明釉	乳白色		近代前期、シェンビー マグカップ、底裏銘「金」、 大正期	
	21	土器	鉢	半筒逆台形 三孔耳	(39.0)	11.95/ 14.45	(10.2)	(40.0)	ロクロ 足踏付		灰黄色	在尾道	近代前期、 見込み刷目「命」	
	22	土器	器台	箱型L字形 盛状	(33.0)	2.48	(28.7)	ロクロ 脚付			にがい 黄褐色	在地	寛土、 土子全面に横 打穿孔。	
遺構外 出土 遺物	23	レンガ	普通 レンガ	直方体	長さ22.5 幅11.0 厚さ0.8 底面2495g(首地含む)				風乾成形		褐色		土子、埴輪セルクル目地 打付。	
	24	石製品	硯	小型 長方形	横断面欠損、全周研削、 縁部赤装、 長さ(3.15) 幅3.0 高さ0.8 溝(凹部)部内高0.5 縦側溝0.22 重さ12.8g								近代前期、	
	25	石製品	石 磨き		円筒形に研削、正面・側面 や研削、下面欠損、 縁部赤装、正面に 赤字印、 長さ(12.2) 幅7.0 厚さ217.3g								寛土、墨土中央下「来」	
	26	貨幣	銀貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	27	貨幣	金貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	28	貨幣	銅貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	29	貨幣	銅貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	30	貨幣	銅貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	31	貨幣	銅貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									
	32	貨幣	銅貨		長：1.6 幅：0.7 厚：0.1 重：1.5g									

表 5 出土遺物観察表 (18) 木製品 ①

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	加工・成形の特徴/法量 (cm) (鑑定)・(保存)	備考・時期
SK 35	木1	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削、右側削り減り。長さ13.9 最大幅3.2 高さ1.7~2.6 台厚さ0.8 前歯径0.7×0.8 重量28.8g	小児用。
SK 35	木2	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削二角形。横溝孔後直前方。長さ21.1 最大幅5.65 高さ1.9 前歯径0.94×1.0 重量62.1g	森積残存。No.31
SK 35	木3	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削二角形。横溝孔後直前方。長さ21.1 最大幅5.35 高さ2.05 前歯径1.2×1.4 重量49.7g	No.25
SK 35	木4	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削三角状。前歯左寄。横溝孔後直前方。長さ21.5 最大幅5.2 高さ2.0 前歯径1.0×1.3 重量39.6g	森積残存。No.15
SK 112	木5	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。つま先・踵部削ぎ落とす。長さ21.0 最大幅6.7 高さ3.1 台厚さ0.7~1.2 前歯径1.06×1.5 重量48.4g	
SK 44	木6	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。左側削り減り。長さ24.0 最大幅10.18 高さ2.28 前歯径0.9×1.3 重量196.7g	No.3
SK 44	木7	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。つま先に凸部。右側削り減り。横溝孔後直前方。長さ20.25 最大幅7.0 高さ2.7 前歯径0.7×1.4 重量131.7g	表に黒色顔料。No.2
SK 86	木9	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。つま先部削ぎ落とす。側面・縦溝とくに斜孔。底面中央長持脚形彫り抜き部帯着2つあり。長さ21.8 最大幅6.3 高さ2.7 台厚さ0.9 前歯径0.8×0.9 重量67.9g	下駄No.1
SD 10	木10	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。前歯右寄り。前歯斜孔。表中央に径1.5 鋭角状溝。左側削り減り。長さ14.05 幅5.25 高さ2.3 台厚さ0.4~0.5 前歯径0.5×0.9 重量35.8g	小児用。No.4
SD 10	木11	木製品	下駄	角型通削下駄	両面削り取り。前歯平削。前歯左下に打込み釘。縦溝1つあり打込み。横溝斜孔。横溝孔後直前方。長さ18.4 台上最大幅6.4 台下最大幅6.9 高さ(3.4) 台厚さ1.9 前歯径0.7×0.8 重量31.1g	芯持片(前部) 直大釘
SD 10	木12	木製品	下駄	角型通削下駄	両面削り取り。前歯平削。前歯直下打抜き。前歯左右斜めに斜孔1つ打込み。縦溝斜孔後直前方。長さ14.83 台上最大幅6.0 台下最大幅6.5 高さ(3.2) 台厚さ1.5 前歯径0.6 重量68.9g	芯持片(前部) 直大釘
SD 10	木13	木製品	下駄	丸型仰下駄	両面平削。側面左側のみ平滑に2分。踵部削ぎ落とす。長さ23.0 台上最大幅7.7 前歯幅8.2 高さ2.7 台厚さ1.0 前歯径0.85×1.0 重量48.1g	下駄No.1 芯持片(前部)
SD 20	木14	木製品	下駄	丸型仰下駄	中央軸線の上に5.5/8.5 間隔で木釘打ち込み。踵部全体に厚削り。長さ22.9 最大幅7.4 高さ2.4 台厚さ0.8 前歯径1.0×1.05 重量55.1g	
SK 62	木15	木製品	楕円	長台形	略四角面三角形状。柱目。長さ34.6 先端幅4.7 基部幅8.1 最大厚11.5 厚さ1.4~2.6 橋孔幅8.15/横3.3 重量283g	No.2
SD 10	木16	木製品	楕円	長台形	略四角面三角形状。柱目。長さ34.0 先端幅4.0 中央部最大幅9.4 高さ0.9~2.2 橋孔幅7.1/横(2.9) 重量157.2g	
SE 03	木17	木製品	楕円	長台形	略四角面三角形状。柱目。長さ31.2 先端幅5.1 基部幅7.7 最大幅10.4 厚さ0.8~1.5 橋孔幅7.2/横3.6 重量161.8g	
SK 03	木18	木製品	楕円	長台形	略四角面。両端部欠損。凸凹部分。長さ72.0 座位幅4.0×4.0 座位端3.2×3.2 重量454.2g	
SD 10	木19	木製品	楕円	長台形	丸形。長さ(62.6) 直径2.6~2.85	SD10上層(SD12)の可動性あり。
近代 基礎工 掘方	木20	木製品	楕円	T字形	楕円(3.8×2.0)の穴を穿孔して鋼を挿入。楕円面に2.0×1.2の穴を2ヶ所穿ち、1.7×1.0のほみ溝を打ち込む。桁直線を削り、細い釘を打ち込んだ痕跡が認められる。長さ62.6 楕円部20.7 径10.8 高さ1.6 桁部長さ3.9~4.2 径3.2 桁部3.4×1.7 重量328.3g	
SK 56	木21	木製品	曲物	円形	両面平滑削。柱目。外径12.8×11.9 高さ2.2 重量16.2g	
SK 95	木22	木製品	曲物	円形	内外両面平滑削。平欠。径18.1 高さ0.65 重量66.6g	
SD 10	木23	木製品	曲物	円形	内外両面平滑削。平欠。直径12(3.0) 高さ0.7 重量50.6g	下層。
SD 10	木24	木製品	曲物	タウイ形	略六角形。側面削り減り。側面・底面内面より平削した部分部分を漆で統合・固着。側面は長さ80.7/幅5.3~0.5の薄板を巻く。幅0.4の縦溝を4ヶ所所定。直径具12.8。底面は径17.0で、中央部に凸部。口径30.6 径21.5 高さ6.8 重量197.1g	下層
SD 10	木25	木製品	曲物	円筒形	底面欠損。側面平滑。側面は長さ40.4/厚さ0.3の薄板を巻く。幅0.4で固定。直径長8.1 外径径10.7 重量(8.2)	下層
SD 10	木26	木製品	曲物	円筒形	底面欠損。側面平滑。側面は長さ30.0/厚さ0.3~0.5の薄板を巻く。幅0.5~0.6の板の厚さで固定。直径長10.5。底面固定用の木釘2ヶ所あり。外径径14.0 高さ11.65 重量172.1g	下層
SD 10	木27	木製品	曲物	円筒形	底面欠損。側面平滑。側面は長さ114.0/厚さ0.1~0.25の薄板を2~3巻きに巻く。幅0.6の板の厚さで固定。外径径17.0 径高7.05 含水重量137.8g	下層
SD 10	木28	木製品	管	棒状	完形。長さ20.3 直径0.8~0.55 重量2.26g	最下層。
SD 26	木29	木製品	杵子	所部欠損。表面硬化。	長さ(14.3) 基部径11.0/幅10.2 最大厚0.9 柄部径2.3/幅2.7 重量25.7g	
SD 10	木30	木製品	柄杓	柄部底面欠損。基部側面は長さ44.0/厚さ0.3~0.4の板目薄板を巻く。幅0.3~0.4の板の厚さで、柄を挿んで2ヶ所で固定。柄を差し込む穴は縦1.2/横1.5。両面長方形の柄の先端を小穴(5.6×2.1×1.0)に差し込み、この小穴と柄部を樹皮で固定する。全长50.0 柄部外径12.8 径高(10.0)。柄径は48.3 幅0.43~2.2 厚さ0.5~1.1 含水重量260.9g	下層No.17	
SK 123	木31	木製品	器	楕円	持ち手環をハート状に削り取る。下面に脚形込み用の溝状凹部。直径削り減り。長さ(6.6) 幅24.3 厚さ0.8~1.0 重量52.7g	
SK 38	木32	木製品	器	環状	シロコ漆。径0.2の縦溝を縦状に巻き付け環元を包む。長さ50.5 直径0.6 重量65.4g	
SK 106	木33	木製品	位牌	遊台形	位牌台部分。側面平滑削り。うち正面のみ平削状削り。上面無彫。側面平滑。上面平滑削。中央部に1mmの小孔。一部硬化。上面径6.3/幅3.0 下面径(3.8) 高さ1.95 重量41.2g	No.7
SD 10	木34	木製品	羽子板	両面平滑。縦釘2本。略方形。長さ26.0 上幅幅9.3 下幅幅7.0 距離幅4.2 柄径0.3/幅1.45 高さ0.8 重量41.6g	No.4	
SD 10	木35	木製品	羽子板	中央に径6.0cmの縦釘あり。横釘部短く平滑。横釘部内外に微小窪みあり。略完形。長さ28.2 上幅幅8.3 下幅幅6.4 距離幅4.4 柄径0.6/幅1.5~1.7 厚さ1.0 重量46.6g	下層。	
SD 10	木36	木製品	炭化板	両面炭化。炭化層多量付着。長さ(36.7) 幅(13.5) 高さ4.5 重量82.9g	下層。	
SD 10	木37	木製品	刺繍	一部残存。底面・芯持片。長さ(13.0) 幅(8.8) 高さ4.5 重量1.6g	最下層No.2	
SK 35	木38	木製品	器具	楕円。平欠。直径2.6。両端部削。短形丸。芯持片。長さ56.7 幅3.25 高さ3.0 底面削り高さ0.8/幅2.2 穴(小)長さ1.48/幅1.2 穴(大)長さ3.3/幅1.0 重量208.7g	No.29	
SK 44	木39	木製品	建築材	楕円穴。凸凹部に凸部。長さ(96.2) 幅3.3~0.5 厚さ1.7 穴(小)長さ4.0/幅2.8 穴(大)長さ7.2/幅2.8 重量273.9g	No.4	
SK 56	木40	木製品	柱材	断面六角形。下層側縁線経直。上面部欠損し穴付。4層中2面に短形穴各2。芯持片。長さ(53.0) 幅(8.6) 高さ(5.6) 厚さ(2.1) 重量2.0~2.3 四方穴し穴(大)長さ(11.6) 幅(2.6) 四方穴し穴(小)長さ(6.5) 幅(1.2) 重量2.7/横0.8 高さ2.5/横0.8 重量397.2g	No.10	

(V-9. 出土遺物 63頁→) 郵便に関わる資料に、時期不明な丸形ポストのミニチュア磁器製品(外16)がある。赤色顔料は剥落している。実物と異なり、前扉の鍵穴が横向きで、把手が表現されていないことを特徴とする。

表土からは多数の赤煉瓦も出土した。100点以上観察したが、刻印は確認できなかった。これには目地の残存も影響している。観察可能な煉瓦では、縮緬模が認識できる個体ばかりであった。『新編高崎市史 通史編4』や『高崎市制100周年記念写真集』などで明治38年に完成した本局舎の正面外観写真を見ると、洋風木造2階建てと考えられる。ただし、明治・大正期の付属建物や塀なども含めた郵便局舎に、煉瓦造り建築が含まれていたのかどうかは、当時の資料を確認できていない。参道を挟んだ南向きの群馬郡役所はイギリス積み煉瓦塀で囲まれており、1931(昭和6)年の西埼玉地震による倒壊を想像できる。

近世遺物は陶磁器類・土器類・瓦・木製品などで、18世紀～19世紀中葉が主体である。17世紀代の資料は非常に少ない。17世紀後半～末葉頃に開削されたSD-10からの出土が特に多く、溝への投棄棄が常態化していたことをうかがわせる。廃棄土坑からは桶材と下駄、漆桶の出土が目立つ。桶材には便槽も含まれている可能性がある。漆桶の一部には家紋や順号が記されており、SK-35には「近清(清は月が日の異体字)」と朱書された桶が2点あり、江州商人を思わせる。「本手桶」や「本桶」は、桶の素材を表しているものであろう。SK-35とSD-10からは小尻用下駄が、SD-10からは羽子も検出されている。鍛冶・冶金関連遺物としては、SK-60・79の鉄壁、SK-66の羽口(未使用形)、SK-123の取鍋、SD-10の焼形滓などがある。取鍋は白銀町から出土しているが、ほかの土坑は通町あるいは大信寺門前に該当する。焼土が廃棄された土坑は認められたが、今は未検出である。女性を意識させる遺物としては、SK-25・101の耳掻き簪、SD-10の飾、SE-03の内部に鉄葉塊が残存した徳利が挙げられる。寺や葬制を示す資料は、SD-10・22の五輪塔やSK-106の位牌台座、表土の石製塔婆(外25)など、ごく限られる。

表36 出土遺物観察表(19) 木製品②

遺物名	番号	材質	器種	形状特徴	加工・成形の特徴・塗料・塗量(cm)(推定)・(現存)	備考・時期
SK56	水41	木製品	建築材		一端3枚掛継ぎ(段継ぎ)、2枚状、材片面炭化。曲成性あり。志持材。 長さ(51.0) 幅7.6～9.1 厚さ7.3 継ぎ手部長さ(8.2)/深さ2.6 重量707.5g	No.19
SK65	水42	木製品	建築材 籠手材		内端縮緬継ぎ(段継ぎ)、継ぎ手は90°直角。断面形状、志持材。短光形。 長さ30.0 幅7.0/9.5 厚さ7.6 上部物長さ4.4/厚さ2.5 下部物長さ5.4/高さ2.5 重量549.0g	No.6
SD10	水43	木製品	柱材		丸太状材、下節部、二方割付継ぎ手。志持材。 長さ37.3 最大径7.7 物幅5.1～5.6/厚さ2.0～2.8 重量237.2g	No.2
SD10	水44	木製品	笠置材		角釘2本、貫通して現存。短楕。段掛継ぎ(段継ぎ)。 長さ(91.1) 幅2.6～4.0 厚さ2.8 継ぎ手幅長さ4.1/厚さ0.7 重量296.4g	下層。
SD10	水45	木製品	笠置材		短楕穴1、角釘2本一組×3か所=6本。 長さ66.9 幅7.8～8.0 厚さ2.1～2.3 穴穴幅0.6/横1.8 重量423.6g	下層。
SD10	水46	木製品	丸太杖		先端部加工。軽装材。長さ52.5 直径4.0 重量157.8g	
SK35	水47	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。底裏朱書「本桶」、口径(11.0) 底径6.1 器高(6.2)	
SK35	水48	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。底裏朱書「近清」。『清』は月が日の異体字。底径7.2 器高(2.5) 最大径(11.8)	
SK38	水49	木製品	漆桶	腰裏半圓形	内朱漆。底裏朱書「本桶」、口径(13.0) 底径5.9～6.06 器高7.4 高台高1.5 含水重量178.29g	下層
SK46	水50	木製品	漆桶	半圓形	内朱漆。底裏朱書「吉仕入」、底径7.2 器高6.0 高台高1.3	No.1
SK101	水51	木製品	漆桶	腰裏半圓形	内外黒漆。口径12.5 器高(7.0)	No.1
SK104	水52	木製品	漆桶	楕圓形	外黒漆。内朱漆。底裏金漆繪欄間文。底径5.1 器高(4.4) 高台高0.65 最大径(12.0)	No.1
SK106	水53	木製品	漆桶	半圓形	外黒漆。内朱漆。底裏朱書「佐」、体部家紋金母給「丸に三つ拍」、 底径(5.7) 器高(5.2) 最大径(12.8)	
SK110	水54	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。桶内内家紋金母給「水車に草花枝」、抜み欠陥。口径11.6 桶み径(5.7) 器高2.8	
SD10	水55	木製品	漆桶	半圓形	外黒漆。内朱漆。底裏朱書「本口桶」、体部家紋金母給「丸に三つ拍」、 口径(12.0) 底径(6.1) 器高(5.3)	中層 No.1
SD10	水56	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。桶内内家紋金母給「丸に三つ拍」、口径(11.0) 桶み径(5.7) 器高3.3	下層
SD10	水57	木製品	漆桶	半圓形	内外朱漆。口径(12.0) 底径(5.4) 器高(5.7) 含水重量132.7g	下層
SD10	水58	木製品	漆桶	半圓形	内外朱漆。口径(12.4) 底径6.3 高台高1.8 器高6.7 含水重量140.5g	No.5
SD10	水59	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。底径5.8 高台高1.7 器高(5.6) 最大径(11.2)	下層
SE03	水60	木製品	腰裏半圓形		外黒漆。内朱漆。底裏朱書「本手」、口径(13.0) 器高(6.4) 器高6.0 含水重量174.8g	
SE03	水61	木製品	漆桶	丸形	外黒漆。内朱漆。体部家紋金母給取棟。短光形。 口径12.4 底径(6.0) 器高7.1 高台高1.1 重量235.9g	
SE03	水62	木製品	漆桶	半圓形	内外朱漆。短光形。口径(12.3) 底径6.1 器高7.2 高台高1.3 含水重量182.1g	
SD10	水63	木製品	櫛		楕圓小櫛。割付小櫛。両段30本、1寸あたり12本(指木)。 長さ10.7 幅4.1 幅材1.1 総厚さ0.9 小口厚さ0.2 背段大径3.5 含水重量19.4g	下層
SD10	水64	木製品	漆桶	半圓形	内外朱漆。底裏朱書「丹」、器高(3.0) 底径(6.0)	下層
SK12	水65	木製品	漆桶	丸形	内外朱漆。杖端→抜み内。金母給「梅花枝」、口径12.0 器高3.0 桶み径5.6	No.1
SK66	水66	木製品	漆桶	半圓形	炭化により底裏顔面の欠陥。索部番号「入りヤマに青」。	近代

V 自然科学分析

1. 人骨の分析鑑定

生物考古学研究所 橋崎修一郎

連雀町遺跡は、群馬県高崎市連雀町に所在する。毛野考古学研究所による発掘調査が、平成 27 (2015) 年 4 月～同年 7 月まで実施された。墓坑 ST-01 から、人間の胎児骨 1 体が出土したので、以下に報告する。なお、本遺跡は高崎城下町にあった大信寺の門前地と推定されている。時期は、覆土の特徴や明治 13 (1880) 年の大火によると推測される焼土層よりも古いことから、近世の 19 世紀代に比定されている。

(1) 埋葬状態

本墓坑は、調査区の 2 面の南側で検出されている。墓坑自体は東側と西側の 2 基確認されているが、東側から本人骨が検出されており、西側の土坑からは検出されていない。東側土坑の規模は、71cm (南北) × 43cm (東西) × 17cm (深さ) である。埋葬状態の詳細は不明であるが、本土坑は灰の純層で覆われており、貝殻片も検出されているため、貝灰の可能性もあるという。



写真 1. ST-01 全景・人骨検出状況 (北から)



写真 2. ST-01 頭蓋骨検出状況近景

(2) 人骨の出土部位

人骨は、胎児としては保存状態が良く、ほぼ全身骨格が残存している。本報告者が知る限り、現時点では群馬県内出土胎児としては最も保存状態が良い。その原因としては、比較的年代が新しいことに加えて、灰層に覆われていたことによりアルカリ性に保たれていたためと推定される。

(3) 被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は 1 個体であると推定される。

(4) 被葬者の性別

出土人骨は胎児であり、骨の発達が未熟であるため、被葬者の性別は不明である。

(5) 被葬者の死亡年齢

歯の萌出状態および四肢骨の大きさから総合的に判断して、被葬者の死亡年齢は妊娠後期 (第 3 期) の段階で、約 7 ヶ月～9 ヶ月の胎児であると推定される。

引用文献 (著者名の ABC 順)

BAKER, Brenda J.・DUPRAS, Tosha L.・TOCHERI, Matthew W. 2005 『The Osteology of Infants and Children』, Texas A & M University Press

FAZEKAS, I Gy & KOSA, F. 1978 『Forensic Fetal Osteology』, Akademiai Kiado

SCHUEER, Louise & BLACK, Sue 2000 『Developmental Juvenile Osteology』, Academic Press



写真3. ST-01出土頭蓋骨

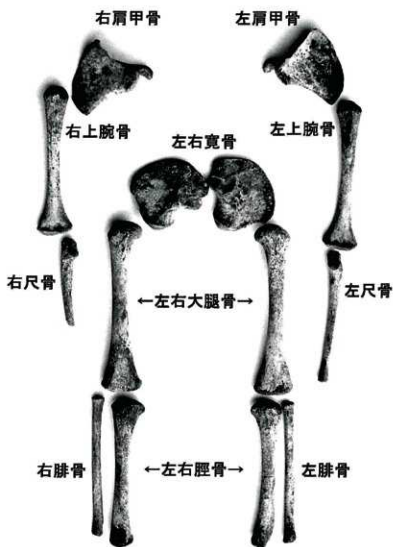


写真4. ST-01出土四肢骨

2. 動物遺体の分析鑑定

生物考古学研究所 榎崎修一郎

高崎市連雀町遺跡は、群馬県高崎市連雀町に所在する。毛野考古学研究所による発掘調査が、平成 27 (2015) 年 4 月～同年 7 月まで実施された。本遺跡の SK-21、SK-27a・27b、SK-36、SK-38、SK-82、SK-101 の 6 基の土坑から、獣骨が出土したので以下に報告する。

1. SK-21 (2面) 出土獣骨

イノシシ(猪)かブタ(豚)の上腕骨と桡骨の骨幹部が出土している。ブタはイノシシを家畜化したものなので、四肢骨だけで野生のイノシシか家畜のブタかの同定は困難である。

2. SK-27 (近現代・1面) 出土獣骨

(1) SK-27a イノシシ(猪)かブタ(豚)の上腕骨・桡骨・脊椎骨・中足骨が出土している。また、シカ(鹿)の大腿骨も出土している。さらに、ウシ(牛)の脛骨も出土している。

(2) SK-27b イノシシ(猪)かブタ(豚)の腓骨が出土している。



写真1. SK-27a 獣骨出土状況



写真1. SK-36 獣骨出土状況

3. SK-36 (桶採取坑・2面) 出土獣骨

イヌ(犬)の大腿骨と脛骨が出土している。また、シカ(鹿)の鹿角片が出土している。イヌは比較的大型である。

4. SK-38 (桶採取坑・2面) 出土獣骨

小型のイヌ(犬)の下顎骨左が出土している。

5. SK-82 (2面) 出土獣骨

イノシシ(猪)かブタ(豚)の上腕骨遠位端部が出土している。

6. SK-101 (2面) 出土獣骨

ニホンジカ(鹿)の肩甲骨・上腕骨・桡骨・尺骨・中手骨、イノシシ(猪)かブタ(豚)の桡骨・脛骨、ウシ(牛)の大腿骨、イヌ(犬)の大腿骨・脛骨が出土している。



写真3. SK-101 獣骨出土状況

まとめ

連雀町遺跡出土獣骨は、個体を埋葬した状態ではなく、動物種や出土部位が混在した状態で検出された。これらの状況は、高崎城 XV 遺跡と同様であり、食用あるいは角や毛皮を加工する目的であったと推定される。

引用文献

榎崎修一郎 2006 「高崎城 XV 遺跡出土獣骨」『高崎城 XV 遺跡』、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.223-230

VI まとめ

連雀町遺跡では、古代～近現代までの遺構群を重層的に調査した。中世以前は調査区全体を面的に調査できなかったが、いくつかの重要な成果も得られた。ここでは、本遺跡の変遷を再度整理し、課題と展望を示しておく。

古墳時代～中世

古墳時代と推測される南西～北東方向の溝・SD-16は、水田耕作に伴う用水路の可能性がある。テフラやプラント・オパールの特異分析は実施していないが、覆土中に含まれる軽石はAs-Cと推測する。長野塚左岸の上並複地区ではC下水田・FA下水田が検出され、東町Ⅲ遺跡においてもC下水田とFA-FP2次洪水層下水田が確認されている。高崎城の坪ノ枳形遺跡などにおいて古墳時代前期の遺構・遺物が確認されていることを考慮すれば、本遺跡周辺においても現況地表下1.5m以上の深さで、C下水田あるいはC混水田の存在が予測される。

B下水田土壌の下位で検出した黄褐色と灰色の細砂層（基本層序トレンチ5・6層）と、その下位に堆積する細砂主体シルト層（同8・9層）のいずれかは、層準的にみれば、本遺跡の東方約200mに位置する真町Ⅰ遺跡・旭町Ⅰ遺跡で確認された9世紀代の汎水層に該当するものと推察する。どちらも溝状遺構の可能性は高いが、平面的には明確に捉えていないため、敢えて遺構名は付していない。上位の黄褐色・灰色細砂については、ラミナ状構成が認められず、短期間に埋没したものと考えられる。直上に存在するB下水田の畦畔とはほぼ同一の走行方向であり、溝であった場合は水田用水路とみてよいだろう。下位の汎水層直下では水田面の検出には至らなかった。

B下水田・SN-01では、東西畦畔を1条検出した。やや幅は広いが、南西約1.2kmに位置する岩押Ⅲ遺跡で確認された大畦および条畦環境とは一致しないようである。田面の凹凸は少なく、いわゆる「休耕地」（坂口 2011『N. 調査の経緯』『岩押Ⅲ遺跡』）と呼ばれる状態であろう。調査区西壁土層断面（H-H'）におけるAs-B直下面とSN-01の田面標高は、93.940～93.980mを示し、調査区内ではほぼ水平であることが判る。この畦畔の直上にはAs-Bを切るようにして細～粗砂層を検出しており、平面的な調査はできなかったものの、畦畔を踏襲した溝状遺構であると思われる。畦畔上にはこの砂が詰まったごく小さな小孔が多数検出され、植物根や動物の生息痕跡の可能性も払拭できないが、大半は杭の腐蝕痕跡と推定しておく。この溝状遺構とは対照的に、並走するSD-18は細砂混シルトや、ラミナ状のシルト・白色粘土で埋没し、堆積速度は比較的緩やかである。中世には、長野塚（西新波塚）を基幹用水とする中小用水路や小河川が大量の土砂を供給したようであり、As-B層上面から近世遺構確認面（4面）までは厚さ40cm以上のシルト質土・粘質土が堆積している。試掘2トレンチ断面では土坑状の掘り込みも確認したが、諸々の制約から平面調査が行えず、中世期の具体的な土地利用については明らかにできなかった。

近世（史料・絵図）【第23・24・26図】

慶長3年（1598）に井伊直政が真輪城から和田へ移転して高崎城を築城するに伴い、連雀町などの各町・宿や寺も移転し、城下町整備が開始される。通町の名が示すように、旧中山道は大信寺山門前を南北に走行しており、慶長7年（1602）に徳川家康が中山道整備を命じ、2代酒井家次が支配した慶長9年（1604）～元和2年（1616）の頃、城下町の中央を貫く現在の街道筋に移設されたといわれる（『新編高崎市史 通史編3』第1章2節）。本調査区は新旧中山道に挟まれた区画の中央部にあたり、街道には直接面していないが、調査区の大半は大信寺の参道とも言える小路に面した「門前」に該当し、この小路は西ノ小路あるいは大信寺境内の掃除人が居住していたことから「大門町」と呼ばれていたらしい（1）。18世紀前葉と幕末頃の城下町絵図には東西大溝のSD-10がはっきりと認められ、本溝を境にして北側が田町と白銀町にあたる。

ここでは、近世の高崎城および城下町を描いた4点の古絵図を比較しつつ、文書史料と先行研究を援用しながら、本調査区周辺の町割変遷を概説する。古絵図は、9代藩主間部詮房の時代（宝永7～享保2年・1710～1717）の『間部氏当代高崎絵図』、文化7年（1810）に作成された『御城内外惣絵図』、安政3年（1856）御改正『上野国群馬

郡高崎御城下町絵図面』万延元年（1860）覚法寺写および所蔵の『高崎御城下町絵図』の4点（2）である。以下、『間部氏当代絵図』・『内外惣絵図』・『安政城下町絵図』・『万延城下町絵図』と略記する。

連雀町遺跡に関わる町々の特徴や変遷について、門前・大門町（参道）・大溝（用水路）を基軸にして以下に記す。

- ①大信寺への参道ともなる小路（大門町）は、新中山道への移設が完了し（17世紀初頭頃）、街道沿いの主要な町割が再編成され、さらに喰い違い木戸の設置に伴う連雀町の移転（1669年）を経て、再々編成された連雀町と通町の一部を分割する形で敷設された可能性が高い。
- ②小路を挟んで向かい合う「大信寺門前」と「通町」については、本来は一体の通町であると考えられ、小路（参道）敷設後に門前が形成されたものと考えられる。大信寺門前は延宝7年（1679）5月以前に起立されている。
- ③大門町小路（参道）の新設時期は、1669年以降、1679年以前と想定する。
- ④「門前」の北境界線にあたる東西大溝（SD-10）は、大門町小路敷設と同時に開削されたと推測する。
- ⑤本遺跡地が被災したと推測される火災は、元和7年（1621）高崎惣町焼失の道観火、享保9年（1724）大晦日あるいは享保12年（1727）晦日の通町出火の大火、享保10年（1725）通町火元の風下6ヶ町焼失火災、寛政10年（1798）城下最大の大火、文化4年（1807）巖瀬町出火の大火、文化9年（1812）本町出火の大火、嘉永元年（1848）中組屋町火元の火災、文久2年（1862）本町出火の大火、以上計8回。
- ⑥白銀町は中山道移設に伴って精町から分割された町で、^{1.5m}鑛師が存在していたが、後には諸高職人が居住した。

（城下町割りと中山道移設）慶長3年（1598）に始まった高崎城下町の建設では、連雀町を高崎惣町の筆頭として大手前に配置し、高崎城と安国寺を結ぶ大手通りを指向した整町型プランを採用していたとされている（矢守一彦 1988『城下町のかたち』、関戸・奥土居 1996）。連雀町は東西に長い両側町で、大手門前から安国寺に至る。精町と白銀町、中組屋町と本組屋町については元々が一体の町で、やはり東西に長い町割が想定されている。通町沿いの旧中山道は遠構に近い位置を走行し、安国寺山門前で大手通りと接する。寺院や粗屋敷、水田に面した部分が多く、軍事的な意味合いも濃い。慶長7年（1602）、幕府から高崎宿に対して「伝馬提書」が出されており、城下町の新中山道への移設は、2代藩主酒井家次の時代（1604～1616）に行われたようである（『新編高崎市史 通史編4』）。旧中山道と比較すれば、高職人が集住し、往還に伴う経済活動や運輸・物流に重点を置いた新中山道との経済効果の差は歴然である。この移設に伴って、一部に整町型プランを残しつつも、主要な町割りは横町型プランへと転換したことが判明している（矢守 前掲、関戸・奥土居 前掲）。

さらに連雀町は、17世紀後半にも町割りの大幅な変更がある。井伊直政の築城以来、城郭整備を本格的に再開したのが、7代藩主の安藤重博である。本丸三層櫓の建築をはじめ、寛文8年（1668）に大手門を建立、元禄5年（1692）には大手門切石補強工事などを行い、城郭整備事業が完成したといわれる。延宝3年（1675）には本町・田町・新町の市日を定めて、城下町繁栄の基礎をつくった。城下町整備に直結する事業としては、寛文9年（1669）、大手門前面に喰い違いの枳形木戸を設けて（3）、元々あった大手前の連雀町1丁目を他所へ移転している。（高崎志、『高崎古代並び諸雜記』『新編高崎市史 資料編7』1999）。

（小路と大溝）連雀町の町割りを『間部氏当代絵図』と『安政城下町絵図』で見ると、中山道を挟んでL字状の区画が向かい合って整然と配置されており、大手を基準とした整町型と新中山道が優位な横町型の融合とも言える。1丁目の移転先特定は難しいが、連雀町の町割りがL字を合わせたような形状、つまり街道と大手通りを挟んで凸形状の主体部を形成し、その周辺に町裏区画が付随する形状となったのは、少なくとも1669年以降と言えよう。大信寺への小路に目を向けると、北東の連雀町区画を分断する恰好で東西に走行していることに注意したい。これは、1669年の連雀町再々編成以降に、大信寺山門から新中山道へのバイパスとなる小路（参道）を新設したものと理解できる。『間部氏当代絵図』が精確であるとすれば、白銀町一本組屋町境界の大溝と門前地-白銀町境界の大溝（SD-10）は、ともに新中山道に到達せず、町裏排水として機能し、城下基幹用水系には編入されていない。また、南北の主要な城下（宿）用水よりも幅広く描かれ、開削後の経過時間が長くないことを示唆しており、屋敷

数の増加に伴って新設されたものと想像される。『安政城下町絵図』では、後者（SD-10）は新中山道をおそらく暗渠によって潜って堀町・連雀町境界にまで延伸・接続されていて、用水系に組み込まれている（4）。前者は町屋排水のままである。

（大信寺）浄土宗京都知恩院末寺、願行山峯院大信寺は、奇行や狂気の咎によって寛永9年高崎城に幽閉され、翌寛永10年（1633）、3代將軍家光によって自刃に追い込まれた駿河大納言徳川忠長卿（家光の次弟）の墓所があることで有名である。安藤重博の祖父、6代藩主の重長は、数度にわたって助命を嘆願したといわれている（『徳川実紀』第2篇）。寛永5年（1665）には4代將軍家綱より、忠長卿供養料として下和田村の内から御朱印100石を拝領し、城下寺院の席願は別格の朱印地107石をもって1位である（関戸・奥土井 前掲、文化年間「寺院社人座願」『高崎町方式』）。忠長卿四十三回忌に当たる延宝3年（1675）、ようやく幕府から赦免され、墓石である五輪塔が建立された。徳川忠長（成名峯院殿前垂相晴徹晩雲大居士）の菩提所、埋葬地であるという特殊な事情が、大信寺の地位を確固たるものとしているのである。このような経緯を踏まえれば、連雀町等の屋敷地を割譲してまで、新中山道と大信寺山門を繋ぐ小路（≒参道）が新設普請された背景には、忠長公供養料としての寺領の大幅な加増、遠忌法要に際しての幕府からの赦免、加えて安藤重博による城下整備事業があるものと推測する。

（大信寺門前）『高崎町方式』（文化年間『新編高崎町史 資料編5』2002）「卅二」寺社門前地の項において、「大信寺門前正法寺門前…安国寺門前…年季門前地之義ハ、中年十ヶ年相済候得者、願出見分有之、猶又中年十ヶ年相済候事」とあり、10年経過後に申請をすれば更新できる年季門前町であることが判る。その成立時期については、12世住職の喚替が大信寺創始110年を迎えるにあたり、寺社奉行の指示によって書上げて増上寺に提出した「記録」が参考となる（5、史料1）。これによると、「…一 寮舎二軒 門前三軒、一 末寺二軒、一 寺内廣敷六拾五間裏は八十間、一 下層敷二拾四間四方、延宝七年五月日 西上州高崎 大信寺 十二代喚替采存」とあり、延宝7年（1679）以前には門前が存在していることが分かる。間部氏時代の正徳4年（1714）には、「大信寺門前 通り町分北側式拾七間三尺」として、門前住人の出火人足や夜番等の役負担を申し付けた文書がある。「自今弥無間断前々之通可被申付者也」と記載されているから、門前は延宝期から存続している。この申付書からは、門前住人を「通り町分」として扱っていること、記載された距離が『万延城下町絵図』の門前敷地の東西の長さにはほぼ一致することも分かる。『万延城下町絵図』での通り町の町境線は、参道を越えて大信寺門前も取り込んでおり、参道によって分割された北側の通り町区画を、大信寺門前地としたものと考えられる。参道普請と門前起立には密接な関係が予測され、ともに1669～1679年の間に起こった出来事と推測する。門前住人の具体像は不明ながら、通り町としての面積は縮小しており、代替地の存在が予測される。

同じく喚替が元禄8年（1695）8月に記した「大信寺由緒並びに什物等書上」（『新編高崎町史 資料編6』266）では、「寺地面五十三間後七拾八間坪敷三千七百八拾貳坪余」となっている。先の延宝期と比べると、旧中山道に面した間口12間分が縮小しており、安国寺門前側へ鉤形に屈出した敷地に通り町を設置したことが原因とみられる。『高崎町方式』「六十八」の「寺社門前并持地借受町家二致候願」によると、「寺社門前町家二相願候節、…中年十ヶ年之内願之通申付候、十ヶ年相立候得ハ、又々相願候」とあり、1695年以前に通り町が大信寺から借り受けたものであろう。大信寺門前と通り町借受地では面積は均衡しないが、両者の間で相互交換的な借受が行われた可能性もある。

しかしながら、『間部氏当代絵図』には、『安政城下町絵図』に見える大信寺門前と通り町が表現されておらず、安国寺と大信寺は一括りの長方形敷地のように描かれている。特に『内外惣絵図』では参道・門前・用水路の全てが描かれていない。絵図と文書記載内容が一致しないこと理由は、例えば借受地や門前は除外して本来の寺地のみ表記したことや、あるいは年限の端境期に該当していたことなどが想像されるが、現状では不詳としておく。

（大門町）『高崎町奉行日記』（6）の火災記事に複数回登場する。享保9年（1724）大晦日、通り火元の大火について「…通り弥平治火元二番東風、連雀町白銀町堀町、槍物町鍛冶町新町上町石屋四郎兵衛東側之西側、中町久平迄焼ル…」とある。調査区一帯は全焼したはずであるが門前の記載はなく、おそらく出火元でもある通り町として把握されていると思われる。続いて寛政10年（1798）正月24日に発生した城下最大規模の大火については、「…

御城内者三百八拾軒、高崎惣町、本町九蔵町田町、連雀町新町新田町、(中略)八軒町元紺屋町白銀町、大門町砂賀町不残、(中略)町家数凡千八拾軒 電數千六百餘、棟數不知…(7)とあり、「大門町」の名が見えるかわりに、焼失したはずの通町の記載がない。同じく文化4年(1807)と文久2年(1862)の記事には大門町・通町ともに見えるが、嘉永元年(1848)の記事では「…白銀町・連雀町・通町・砂賀町…」となっており、やはり被災したと考えられる大門町および門前の名はない。以上の記載の仕方から、18世紀中葉以降に「大門町」という小路名が定着し、やがて小路に面した門前と通町を指して大門町と認識し、通称されていたものと理解される。

門前の住人構成については、寺伝による寺侍・中間や『高崎志』の掃除人以外には具体的に知る手立てはないが、西田美英の『高崎寿奈子』(宝暦5・1755)によると、通町の職種構成は酒屋・質屋・小間物屋・菓子類・茶屋・その他と表記されている。『安政城下町絵図』での通町の位置は、大きく2ヶ所に分かれて纏まりに欠ける。『万延城下町絵図』での屋敷割は複雑で、関戸・奥土居(1996)によれば、旧中山道に面するものと参道に面する部分が入り組み、全体として唐沢年貢地扱いとなっている。城下18ヶ町茶屋仲間87軒の一覧を参照すれば、最多12軒が相生町、次の11軒が常盤町と通町である(『新編高崎市史 通史編3』表76)。相生町・常盤町はともに遠構外の年貢地(『高崎町方』「三十」)であり、高崎城下への出入口に該当する。通町は城下町内の水田に面し、作人が居住していた可能性は高い。田町や連雀町に近接し、新中山道・参道・旧中山道・通町木戸というルート上に位置することが、茶屋の多い理由と考えられる。

近世(1~7期=4面)

前項の内容を踏まえて、遺構群を10期に細別し、大まかな変遷を概述する。

近世で最も古い遺構はSD-23であろう。町割り初期の慶長期~17世紀前葉頃の溝と推測する(近世1期)。この溝を南へ延長すると、通町と連雀町の境界に一致する。次の近世2期は、SD-17・SE-07およびSB-09~11である。SD-17中軸線上には数本の杭が打ち込まれ、塵留め杭であろうか。溝と建物の主軸は中山道と平行もしくは直交している。ほとんどの遺構の主軸は東西あるいは南北を指向し、街道ではなく東西道路、つまり大信寺参道に規制を受けている。よって、近世2期は大門町小路敷設前、17世紀中葉頃の遺構群と想定する。SE-05・07も2期と推測する。後述するが、白銀町側には17世紀前半頃の南北溝・SD-11が存在することから、この頃すでに、SD-10の前身となる小規模な東西溝が存在していた可能性もある。

近世3期は東西大溝のSD-10が開削され、連続的に建て替えられた東西棟の建物群・SB-04~07が主体となる時期であり、大門町小路(西ノ小路)の敷設と大信寺門前が成立した頃であろう。SB-08・SX-02と同じ主軸は他になく、P13・32からは礎板扁平礎上に樹立したままの柱根が検出されたことから、最新時期の独立柱建物と推測した。SD-13aより古いSE-04は、3期としておく。近世4期は礎石建物群の時期である。柱穴群の上面には、SS-02など礎石と思われる扁平礎のまとまりをはじめ、囲炉裏と推測されるSX-01、礎石と土間の礎敷きと推測されるSB-03などが分布しており、SB-08以降は礎石建物が存在していたと考えられる。SK-115は、礎群直下から柱穴群が検出されているため、独立柱建物群よりは新しい。本土坑はSD-10の上端に接するため、この時点で既に埋没が進行していたことが分かる。SK-96・112はともに東西軸の木材廃棄土坑で、SK-112からは下駄が出土している。SK-114bとSJ-10(SK-116は掘り方か)という2基1組の土坑・埋桶を、この時期の便所遺構と推定する。SD-13bとSD-14も4期と推測する。ともに東西方向の溝で、SD-13bには礎石と考えられる石列がある。石組井戸のSE-03からは、全体に煤が付着した徳利や多数の建築廃材(炭化材含む)が出土しており、5期に廃絶したものと考えられる。よって、本井戸の使用時期は4期である。2トレンチ断面では、SD-13aの下部には焼土層より古い溝が存在するようである。平面的に調査できていないため詳細は不明ながら、この溝は井戸の北側では確認できない。

近世5期は火災直後の廃棄土坑群の時期で、1724年と推定する。このうちSK-66については、整った平面長方形を呈して階段状構造を伴う特徴など、他の土坑とは異質であり、何らかの施設を思わせる。完形の羽口が出土

したことも注意される。SD-10西壁(H-H')の28層は火災時に形成された炭化物を含んでいるものと推測され、この時点で底面から70cm以上埋積している。

近世6期は大火後の18世紀中葉頃を想定する。SK-114a・SJ-09の2基1組の便所遺構、主軸が45°前後傾くSK-69a・102、西端で南北主軸を基本として連続的に掘削・重複するSK-67・87・111・113・118で構成される。大火後には建物が構築されずに土坑が主体となり、空室も広い。

近世7期は、18世紀後半～As-A降灰前の時期にあたり、同一溝と推測されるSD-13a・SD-22の護岸溝を伴う溝が南北に走行して、調査区を東西に二分する。小路からの排水をSD-10に落し入れるのが目的であろう。SD-10の埋没は相当進行しており、SD-22は中央部まで進出する。SK-78・84・86もこの時期だろう。

白銀町側の4面遺構群については細別時期の特定は難しいが、礎石建物と考えられる北東隅のSB-12を近世4期とした場合、SK-121・124・125は近世3～4期、SK-123が6期、SK-40・41・129が6・7期の18世紀中葉～As-A降灰前と捉えておく。SD-11については、2期に開削されて3期まで使用されたものと推定する。同じ位置には現代に至るまで何度も溝が掘り直されており、近年まで白銀町は道路側溝から溢れた雨水の排水に苦慮していたようである。

近世(8期=3面、9～10期=2面)

8期は3面(As-A直下～降灰直後)の遺構である。SD-10は3面の項で述べた通り、多数の護岸杭が打ち込まれ、横矢板や横棒を固定していたようである。杭については前段階以前に打ち込まれたまま当期まで残存していることも想定される。SD-13a・22は、As-A降灰直前に埋没が完了している。白銀町のSD-21は、SD-10へと排水するために設けられた屋敷割り境界溝であろう。SJ-06は便所遺構の埋桶と推測するが、2基1組にはなっていない。土坑は3基のみである。

9～10期はAs-A以降の18世紀末葉～19世紀中葉に該当し、木材等廃棄土坑・火災に伴う土坑・埋桶(便所遺構)が主体をなす。門前側・白銀町側ともに、埋没がかなり進んだSD-10(SD-12・19)に近接して埋桶群が並び、屋敷地裏手に便所が配置されているものと考えられる。建物跡はSB-02のみであり、明確な柱穴掘り方や礎板などは確認できず、簡易的な施設と推測する。調査区南側・東側の遺構は希薄で、土坑群の集中範囲は明瞭である。特に小路に近い南側では胎児1体が埋葬されており(ST-01)、門前内の特別な空間であった可能性がある。これらのことから、本調査区の範囲は門前地内にあって、廃棄土坑・便所等がある中庭の空間であったと想定する。白銀町側ではSD-04を境にして、東西で遺構群の様相が異なる。SD-04の時期は出土遺物から幕末～明治初期としたが、4面以降ほぼ同じ位置に溝が掘り直されているため、本溝の開削時期は遡る可能性が高い。桶坂取坑群の周辺にはほかの土坑などが少なく、屋敷地の南側、日当たりの良い裏庭の空間を思わせる。SD-04の西側には大小の土坑が隙間なく重複し、おそらくは廃棄土坑の類であろう。

9～10期のSD-10(12・19)はかなり幅が狭くなり、護岸杭や矢板が多数設置される(PL.6)。杭・矢板の約半数は建築材や桶材の再利用である。細砂の堆積は認められず、腐植物を含んだ暗褐色細粒シルト質の土壌で、多数の陶磁器類・土器類・瓦類を含んで埋没する。

As-A以降19世紀初頭に設定した9期の遺構を列記すると、白銀町側のSK36～38・94・95・107の桶坂取坑とSK-120、門前側のSK-60・63・80・82・83、SJ-01、SD-08・15などが該当する。SK-60・63・83は火災後に埋め戻された土坑で、SK-60・63は寛政10年(1798)、SK-83は文化年間の1807年あるいは1812年の大火によるものであろう。SD-08覆土上面の焼土層も、文化年間の大火と推定する。近代面調査後、調査区全体を10～15cm程度掘り下げて遺構確認したが、近代～近世と推測するこの包含層中には、微少な焼土がほぼ全面で含まれる。SJ-02・05と、SK-42・43がそれぞれ2基1組の便所遺構であろうか。10期は19世紀前葉～中葉とし、大半の2面遺構が含まれる。

近現代(1面) [第25図]

明治5年7月、高崎の⁸⁵新町に郵便取扱所が設置され、連雀町39～41番地に高崎郵便電信局が落成移転されるのは明治24年5月である。明治初年～24年までは、SD-10(12・19)の南側は門前地、北側は白銀町として幕末から継続していたものと考えられる。SK-11やSD-01・02・04は該期の遺構であろう。明治30年(1897)および35年の高崎市街図(8)を見ると、郵便局は連雀町に存在するが、敷地面積は狭く、調査区ははまだ町屋(大信寺門前)のままである。大正5年(1916)の市街図(9)では、新旧中山道を繋ぐように、細長い敷地に拡大している。局舎は明治37年に町町出火の火災で焼失し、翌38年新築されるが、この時に敷地の拡張が行われたものと推測する。大正14年には中山道に面した北側隣接地を買取して、関東大震災の教訓からコンクリート造りの近代的な電話局が建設されている。SE-01からは、建物壁の一部と考えられる漆喰モルタル目地のレンガが出土しており、郵便局敷地内にレンガ造建物が存在したことを示唆する。SB-01のモルタル目地のレンガは、これよりも新しいだろう。白銀町側の調査区北壁には、破砕された大量のレンガが見えている。

昭和9年(1934)の市街図では、現況と同じくL字形の敷地内に、L字状の本局舎・コの字状の電話局舎のほか、付属建物2棟が描かれている。このうち、東西に細長い北西側の建物は、本来の門前(通町)―白銀町境界線、つまりSD-10(12・19)の直上にあたっており、近代基礎6・7はこの長方形局舎の一部とみられる。南東側の小さい建物はレンガ基礎のSB-01の可能性もあるが、特定できない。また、近代基礎5については市街図に見えない。敷地の東端部一帯は空白となっており、SK-06などの廃棄土坑が構築される余地があったことを示している。戦後には駐車場・駐輪場・郵便物搬入口として利用されていたらしい。

電話局以外の本局舎・付属局舎が火災後に新築されたのは明治38年であり、管見に触れた史料では、昭和20年の建物疎開まで変更がない。近代基礎6には建替えと思われる痕跡があり、火災によって建替えられた可能性もある。また、昭和6年9月に発生した西埼玉地震では、高崎市域は烈震(震度6相当)に見舞われ、郵便局一帯では各所で煙突や煉瓦壁が倒壊し、瓦が落下した(10)。局舎自体の被害は不明ながら、例えば湿電池や陶磁器などは当然ながら震動によって落下・破砕したものと想像される。昭和16年度においても通信省におけるダニエル電池の需要が高い(11)ことを考慮すれば、SK-06が西埼玉地震後の一括廃棄土坑の可能性はある。複数土坑が重複している可能性もあり、年号記載資料もあるため、断定は躊躇する。

昭和20年7月、電話局を守るために会計・庶務・局長室などの建物は取り壊し、郵便・貯金・電信機能を各所に分散している。当時すでに、郵便局周辺の家屋については建物疎開によって大半が取り壊されていた。大信寺境内に移転した建物は、8月14日の空襲で本堂とともに全焼した。戦後に復興された局舎については、地盤の強度に合わせて複数種類の基礎工法を組み合わせ、1棟の建物を構成しているものと判断した。擾乱が多いため推測に頼らざるを得ないが、想定図を掲載してある。昭和22年の米軍写真には、敷地一杯に再建された局舎が見え、『写真集 高崎百年』(高崎市2000)に掲載された高崎郵便局の写真(39p)も同じ局舎である。想定図はこれを参考に作成した。26年の火災後に再建された局舎も同様の建物と考えられるが、調査区内では杭基礎などに建替え痕跡は認められない。よって、近代基礎1～4などについては、昭和22年あるいは26年の局舎基礎としておく。

おわりに

実質的には200㎡ほどの調査区であったが、遺構の密集度は高く、遺物量は非常に多い。大量に出土した陶磁器類については、筆者の力量不足から計数・分析・検討を加えることができなかった。今後の課題として反省したい。また、近現代～近世面の調査に大半の時間を費やしたため、古墳時代～中世面の調査はきわめて限定的になってしまった。ご海容を乞うとともに、いくつかの補足を呈示しておきたい。

近世陶磁器類の構成は、農村地帯の玉村町上福島中町遺跡と大きな違いはないとみられ、鍋島や輸入陶磁器などは見いだせなかった。19世紀代のいくつかの土瓶類については、茨城県松岡焼であることが判明した。発砲を伴う場合もある厚い釉薬と、黒色鉄物を多量に含む胎土が特徴的で、江戸遺跡では出土事例も増加しており(12)、

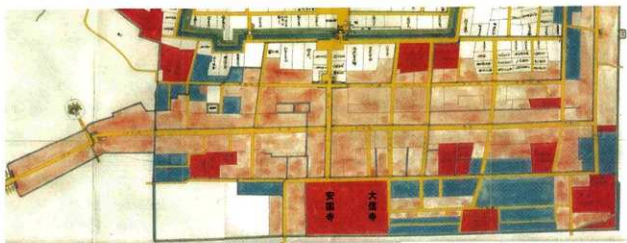
上州への流通経路については江戸経由以外の内陸経路も想定される。例えば 18 世紀以降、福島伊達・信夫郡から常陸を経由して上州を結ぶ奥州亶種の流通販路網が有力な産種商人によって確立していたと考えられ(13)、こうした動きが 19 世紀代の松岡焼の流通にも影響を与えているのかもしれない。

門前住人の構成については、SE-03 から鎌や農具柄が、土坑からは小児用下駄・人形・像・ミニチュア(ままごと道具)・箱庭道具・扇笛・簞などが出土しており、その多様性がうかがえる。また、白銀町・SD-10・門前地のいずれからも、鍛冶や鋳造に関わる遺物が出土しており、これに携わる人々がかいたものと推測する。門前地内部の空間利用については、東西に細長い敷地を南北溝(SD-13a・17)によって分割し、小路との間には前庭的空間を設定する。この空間に埋葬された胎児については、灰で被覆される埋葬法から大名塚に関わる血筋と想定しているが、未熟児に対する埋葬法の可能性もあり、検証が必要である。SK-56 からは炭化建築材とともに多数の瓦が出土しており、瓦葺礎石建物が存在したことが分かる。大溝であった SD-10 は自然埋没と埋め戻しによって小規模な川排水路へと変貌し、結果的には隣接する町と門前の敷地面積拡大に繋がっていることも興味深い。

本遺跡では期せずして高崎郵便局・電信局の調査も行なった。蒸気機関車・ガス灯・煉瓦建築などと並び、郵便と電信もまた、近代化の象徴である。1800 年にボルタ電池が発明されて以来、電気を用いた理化学的研究や電気学の進展は著まじく、電信・電話と電池類や発電機の開発は軌を一にしている。明治 4~6 年には海底電線と国内電線の急速な敷設によって、国内外の政治や為替をはじめ網などの各種相場情報が、航路・陸路に比べて圧倒的な速さで、東京や横浜、地方都市に入るようになった。電信と電話を支えていたのは水力・火力発電などによる電力線よりもむしろ、戦後に至るまで液体型電池が主流であり、一般家庭にも普及していた。磁器・土器・ガラス・金属・炭素・液体化学薬品という異質な素材を組み合わせ、多業種を架橋して、国内電機・理化学メーカーによって販売された、極めて近代的な道具かつエネルギー源が、ダニエル電池をはじめとする湿電池であると言える。

VI まとめ 脚註

- 1) 川野辺貞 1797(寛政9)『高崎志』
高崎市 2002 高崎市民俗調査報告書第八集『マチの生活と民俗の変化』
「高崎古代並びに誌雑記」(『新編高崎市史 資料編7』)においては、文化4年(1807)の羅漢町出火の大火の記事で「通町大門町連尺町」と記載され、文久2年(1862)本町出火の大火についての記事中には「大門町白鳥町元相屋町」とある。いわゆる「横丁」の意味としての大門町という小路名が町名と同列に並ぶことから、大信寺門前と門前向かいの通町を総称して、例えば「○○横丁」のように、大門町と呼称していたものと考えられる。
- 2) 高崎市史編さん室監修・(株)協和街作り研究所編『高崎街づくり変遷図史』ならびに『新編高崎市史 資料編5』付図より転載し、加筆。
- 3) 三の丸大手門は、土塁と濠がわずかに食い違っているが、実質的には平入り虎口である。土塁や堀で構築された枳形や馬出を伴わず、強力な横矢掛りもない平入り虎口では、戦間期ではいかに脆弱である。すでに軍事性が重視されない17世紀後半であっても、大手門虎口の体裁としては、登城者の管理や城門の監視を含め、大手門外側に枳形の水戸を設けることで、体面的を保つ必要があったものと推察する。
- 4) 田町の株式会社ダイイチストア(調査区の中山道を挟んだほぼ正面)の高橋克氏に伺ったところ、SD-10の後継と思われる溝は戦後まで用水路として機能し、魚が釣れたという。溝は中山道を暗渠で潜って高崎郵便局(調査区)の敷地内へ伸びていたようである。
- 5) 群馬県立文書館「大信寺文書」『記録(上野西上州群馬高崎順行山幸殿院大信寺)』(PF8404 文書番号 9/50)。印刷活字化された釈文が管見に融れなかったため、白文を掲載した(史料1)。
- 6) 『高崎古代並びに誌雑記』『新編高崎市史 資料編7』
- 7) 同上
- 8) 高崎市史編さん室監修・(株)協和街作り研究所編『高崎街づくり変遷図史』より転載。
- 9) 同上より転載。『新編高崎市史 資料編9』の資料336、高崎郵便電信局新築工事の落札に関する上毛新聞の記事によれば(明治23年9月5日)、「…東西35間余、南北7間余…」とあり、敷地規模はおおよそ64m×13mであったことが分かる。
- 10) 『新編高崎市史 資料編10』資料169-「上毛新聞」昭和6年9月22日
- 11) 逓信省工務局 昭和16年度『工務統計要覧』(昭和18年2月発行)によると、電信用としてダニエル電池約4万個、レクランシー電池4千個余り、乾電池1.8万個で、電話用としてダニエル電池3.2万個、レクランシー電池3.6万個、重力電池1.8万個、乾電池1.4万個となっている。余計加入者宅内電話機送信用としては、レクランシー電池71.8万個、乾電池6.5万個となっている。乾電池よりも湿電池の方に依存しているのは明らかで、乾電池の品質が安定していないことが最大の理由らしい。ただし、利潤が何倍する道具システムが一度確立されると、メンテナンスの煩雑さや壊れ易さだけでは、それを大きく変更させる理由とはならないことも示されている。
- 12) 瓦吹 堅 2015 平成27年度特別展パンフレット『松岡焼の世界II』高崎市歴史民俗資料館
- 13) 高崎市 2004『新編高崎市史 通史編3』第3章4節

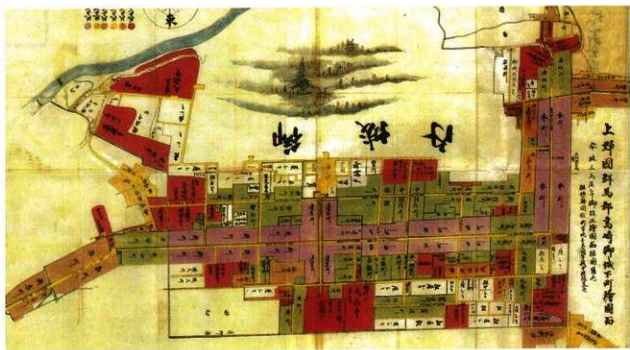


宝永7～享保2年(1710～1717)『間部氏当代高崎絵図』(部分)



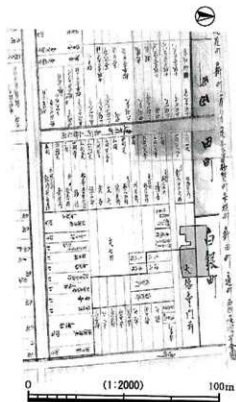
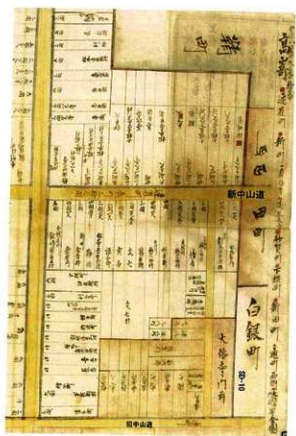
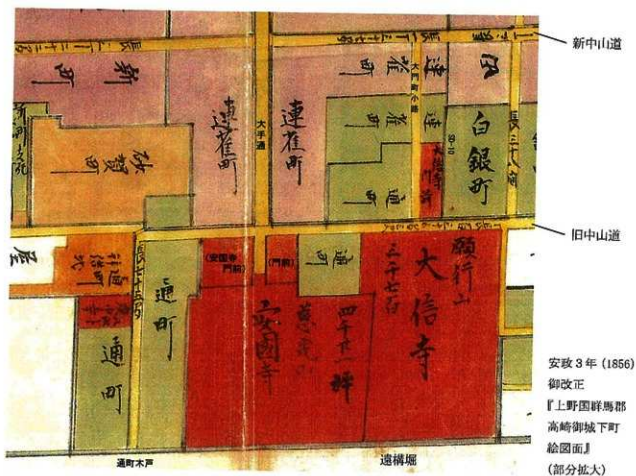
*本頁は原図を転載し加筆。
全て縮尺任意、右が北。

文化7年(1810)『御城内外惣絵図』(部分)



安政3年(1856)御改正『上野国群馬郡高崎御城下町絵図面』(部分)

第23図 高崎城下町絵図(1)



万延元年(1860)覚法寺写・所蔵『高崎御城下町絵図』(部分)

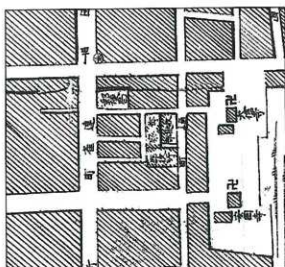
『高崎御城下町絵図』(部分)

現況図に合わせて縦横拡張、調査区反映

第24図 高崎城下町絵図(2)



明治30年 郵便局周辺市街図 (約 1/5000) 上が北



大正5年 郵便局周辺市街図 (約 1/5000) 上が北

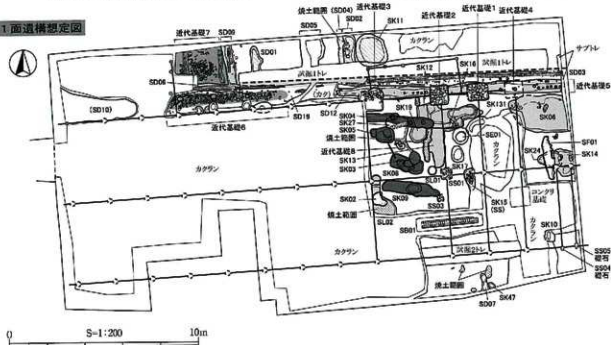


昭和9年 郵便局周辺市街図 (約 1/5000)



郵便局周辺現況市街図 (1/5000)

1面遺構想定図



第25図 近現代郵便局周辺地図・1面遺構想定図

史料1 大信寺由緒・記録 (大信寺文書)

(記録)

上野國西上州郡馬場高崎

願行山家院院大信寺

今年五十一百拾年

元龜元年(979)大信寺奉創之

開山教養治教

從善寺院僧顯勝立移住後

河内守國寺僧顯勝住持

本尊阿彌陀如來

鎮守護助大明神臣國敷實輪三鎮奉每歲七月廿七日祭禮在之

三代日蓮宗不殘一代紫衣之事

從前顯勝寺僧上院僧 權僧強五申投布成成

為善業案在成成下院

四代日蓮宗研究代上二年之間以林顯所化候事

權現權御代新撰御法成之節停止住候

寛永末 西曆四月六日

關河大納言長公御妻去被前辨御者

御成名

御位附二成成候事

家院院殿前相時敬吸堂大信上

伝通院定尊陣浪御崇告

御年冠候御一 周忌御一拾二回又迄每度下御之

御法事則御付候但廿七年御忌者願写之御法

事在之儀每度御法事之節名城主江御奉書被

成下御法事申御奉書等從城主御勅被成候

慶安二年八月四日 家光公御朱印七百十日代日

淨智哲為頂戴仕候

寛文三 御十一代日心普目我

家院院御供領御請御申上新知白石林儀仕候事

寛文五 歲歲行院御朱印頂戴仕候事

延寶二 御年四月六日御石塔御建立之事

毎日御茶湯御供日夕三時之勤行舞舞御初月忌

御所願鬼御拜月在知之節衆集會仕御法事執行

仕候事

寮舎二軒 門前二軒

末寺一軒

寺内藏表六拾五間表八十間

一下屋敷一拾四間四方

延寶七 高曆五月日

西上州高崎

大信寺 一喚燈榮存

一社社御奉行松平山屋守御由緒在之寺者御前住

為御付候傍之左記録之儀上申上移移馬場八年申五

月 歳有候様願去之御請成候御申上二増上寺

廿八代忠孝之代寺之御書上申候一 申末二見寺之

御書上申候上申候意御請成候御朱印五拾石

以上迄願者大寺斗石之外願札之寺者知有石依

多少御申申御書御物等廿廿代御札寺者三

拾文書並御書御物等御請成候御朱印五拾石

任候大信寺五拾石文書御請成候

一増上寺御所之御御御請成候御書御物等

之文二而大信寺三三列御札御書御物等御請成候

御書御物白紙三拾枚御書御物御書御物等御請成候

分者御請成候之先二願出御候御書御物

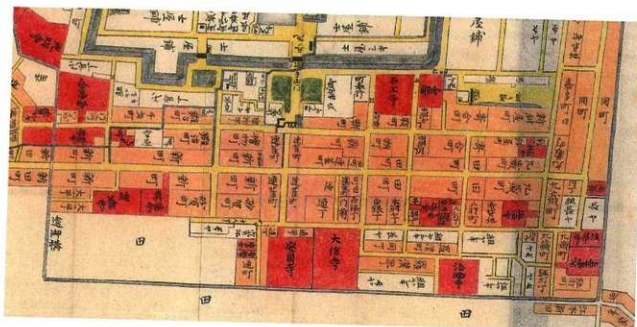
公方御書御物御書御物御書御物御書御物御書御物

御月比仕候為御代之御書御物

延寶九年

三月日

大信寺十二世榮存



年不詳 『高崎御城内外縮圖』(部分)

第26圖 高崎城下町縮圖(3)・史料1

引用・参考文献〔V章2節1面（近現代）およびVI章まとめ脚注以外〕

- 江戸時代後期『商家高名録・諸業高名録』〔復刻版〕 萩原進・近藤義雄編 1983 みやま文庫
 ※『商家高名録』は文政10（1827）年、『諸業高名録』は大正2（1813）～同10（1839）年頃開版
- 全国営業便覧發行所 1904『群馬縣營業便覧（上）』〔復刻版〕 相原伸・萩原進編 1976 みやま文庫
- 江戸通誌研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 扇本真吉・若日田利助・高津 清・村尾 繁 1917（大正5）『電気工學初等叢書 電池工學 全』建築書院
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
- 三洋電機（株）監修 2006『よくわかる電池』日本実業出版社
- 船田幸一・設楽光弘・原田雅純 2000『群馬の郵便』みやま文庫
- 福田尚久編 1898（明治30）『高崎繁昌記 全1冊』榮林堂〔復刻版〕高崎市史編さん考編 1990
- 篠原 宏 1987『明治の郵便・鉄道馬車』雄松堂出版
- 武井豊治 1994『古建築辞典』理工学社
- 大日本電氣研究所編纂 1917『誰にもできる最新乾電池及漏電池製作 簡取扱法』
- 千鹿野茂隆修 高澤等著 2008『家紋の辞典』東京堂出版
- 通信省 1892『電話機使用法 全』
- 日本経営史研究所編 2001『進取の気性―神電氣120年のあゆみ』神電氣工業株式会社
- 松原典明 2012『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣
- 藤村哲夫 2002『電気発見物語』講談社
- 森谷春夫 1994『大工棟梁の知恵袋』講談社
- 石井寛治 2010『日本郵政史研究の現状と課題』『郵政資料館 研究紀要』創刊号
- 井上定幸 1998『高崎城下の商人と職人』『高崎市史研究』第九号 高崎市史編さん専門委員会
- 井上早朝 2011『日本における近代郵便の成立過程』『郵政資料館 研究紀要』第2号
- 今村嘉宣 2015『松風の創業者 松風嘉定について 美術陶磁器から人工陶歯まで』ICD Journal 40巻1号
 一般社団法人 国際陶磁器科学士会日本部会雑誌
- 乾 昭文・山本充義・川口芳弘『江戸から明治の電気』『国土館大工学部紀要』第5巻
- 船岡政志 2011『明治黎明期におけるインフラ事業の性格再考』『社会システム研究』第23号
- 江戸通誌研究会 1996『江戸時代の墓と葬制』〔発表要旨〕
- 菊前直雄 1979『明治初期のガラス工業の系譜』『国連大学 人間と社会の開発プログラム研究報告 雑貨産業研究部会』
- 西宮正親 2012『電気通信機ビジネスの発展と企業家活動 ―沖野太郎と岩垂邦彦―』（日本の企業家活動シリーズ N0.50）
 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
- 鈴木一男 1996『湘南地方における赤煉瓦・耐火煉瓦と産業考古学』『坂益秀一先生追憶記念 考古学の諸相』
- 関戸明子・奥土居尚 1996『高崎城下町の形成過程と地域構成』『歴史地理学』180号 歴史地理学会
- 中島裕吾 2007『戦前日本での電話事業における技術問題』『企業家研究』第4号
- 原田雅純 1998『資料・高崎市内郵便局及び電報電話局の沿革』『高崎市史研究』第九号 高崎市史編さん専門委員会
- 長谷川信 2007『通信機ビジネスの勃興と沖野太郎の企業家活動』『青山経営論集』第42巻 第2号
- 樋口孝彦 2015『明治前期の情報通信をめぐる「近代都市京都」の形成 ―三条通りの新聞社と洋館建築より―』
 日本マス・コミュニケーション学会
- 前島正裕 2007『明治初期の電気産業と職工』『研究報告 第30巻』国立科学博物館
- 森 哲 2007『板ガラス製造技術発展の系統化調査』『技術の系統化調査報告 Vol.9』国立科学博物館
- 吉田夏樹 2012『明治7年に竣工した旧大阪府庁舎の基礎に見られた石灰コンクリート』
 『G B R C Vol.37 No.4』一般社団法人 日本建築総合試験所
- 越前区郷土と天文の博物館 2005『平成16年度特別展図録 肥やしのチカラ』
- 川越市立博物館 2003『博物館だより』第37号
- 秋田県公文書館 2011『平成23年度企画展図録 近代秋田の電気事業』
 社団法人電池工業会
- 2004『明治・大正・昭和の乾電池②』『でんち』平成16年10月 2005『乾電池の歴史②』『でんち』平成21年1月
 2005『乾電池の歴史③』『でんち』平成17年5月 2008『初期の電池（1）』『でんち』平成20年7月
 2008『初期の電池（2）』『でんち』平成20年8月 2008『初期の電池（3）』『でんち』平成20年9月
 2009『日本の電池の始まり（2）』『でんち』平成21年1月 2009『日本の電池の始まり（3）』『でんち』平成21年2月



速雀町遺跡 1面（近現代）全景空撮（上が北）

遺構写真図版



速雀町遺跡 1面（近現代）郵便局敷地全景（上が北・町割り線は安政年間絵図から推定）



連雀町遺跡 4面 (As-A 降灰前) 全景 (上が北)



連雀町遺跡 4面 (As-A 降灰前) 中心部全景 (上が北)



近代基礎1~3 / SD-03 樋管 全景 (1面・東)



近代基礎5・6・7 / SD-03・06 樋管 全景 (1面・西)



近代基礎5 柱材樹立状態 (1面・南西)



近代基礎5・6・7掘り方 (SD-12・19) 全景 (1-2面・西)



近代基礎5 柱材 / SD-03 樋管・土管検出状況 (1面・南西)



近代基礎6・7 近景 (1面・北)



SS-01 (戦後局舎基礎) 近景 (1面・南東)



SB-01 レンガ砌コンクリート基礎 出土状況 (1面・南東)



SK-04・05・12・16/ 近代基礎1~3/SD-03 遺構確認状況(1面・東)



SK-11 土層断面 焼土廃棄状況(1面・西)



SK-12・16 / SJ-02・03 全景(1面・東)



SK-15 杭基礎・柱根・礎板・根固石 全景(1面・南東)



SK-21 / SS-03 遺物出土状況(2面・東)



SK-27 松丸太出土状況 / 近代基礎8(樹立杭) 全景(1面・南)



SK-27 集積動物骨検出状況 近景(1面・北)



SK-25/ SJ-04 全景(2面)、SK-28(炭化材)・29 全景(4面・南)
SK-06 全景(1面)



SK-35a 木製品検出状況・全景 (2面・南東)



SK-35b 建築材・曲物・陶磁器出土状況 (2面・南)



SK-01 炭化材検出状況・全景 (4面・東)



SK-36 ~ 38・94・95・107 全景 (2面・南)



SK-56 炭化材検出状況 (4面・南東)



SK-60 上層統土层 遺物出土状況 (2面・北西)



SK-62 鍬・漆碗蓋検出状況 (2面・南)



SK-66 遺物出土状況 近景 (4面・南東)



SK-69a 全景 (4面・南東)



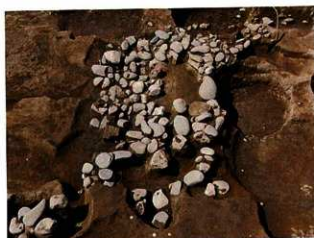
SK-79 遺物出土状況 (4面・南)



SK-98 土層断面 (2面・西)



SK-101 動物骨・桶材検出状況・全景 (2面・東)



SK-115 全景 (4面・南) / P-65 (中央下)・P-66 (左下)



SX-01 (罫伊麻) 全景 (4面・南)



SX-01・02 / SK-117 全景 (4面・西)



SB-03 石列・礎敷 全景 (4面・北西)



P-21 柱礎・礎板礎 検出状況 (4面・南)



SD-10 全景 (4面・東)



SD-10 中央部 As-A 遺構の護岸杭 (2面・北東)



SD-10 全景・地面掘出し状況 (西) ベルト上面がAs-A直下 / 左上はAs-Aに覆り込まれた近代基礎7張り方



SD-10 As-A 降灰直前頃の護岸杭群 (3-4面・南西)



SD-10 (SD-06・SD-19) 西壁土層断面 (1-4面・東)



上段：SD-10下層 左：骨物、右：寛永通寶銭附
下段：SD-10上層 漆碗 左：笹、右：刺藪草



北東西遺構群全景 SD-10護岸堤およびSD-12礎石 / SD-10 (SD-19) 護岸杭検出状況 (4面・南西)



SD-11 全景・遺物出土状況(4面・南)



SD-13a 全景(4面・北)



SD-13a 護岸転用板瓦 近景(4面・北西)



SD-16 全景・土層断面(8面・北東)



SD-17 全景・杭検出状況(4面・南)



SD-21 全景 / SJ-11 足場覆板・埋戻し標 検出状況(3-4面・南)



SD-20 (SK-38 掘り方底面) 遺物出土状況(4面・南西)



SD-21・25 / SJ-11 全景(4面・南)



SF-01 検出状況 (1面・北)



SN-01 As-B 下水田 畦畔検出状況 (6面・西)



埋植群全景 SJ-01・02・05・06/SK-42・43/SD-12 (2面・西)



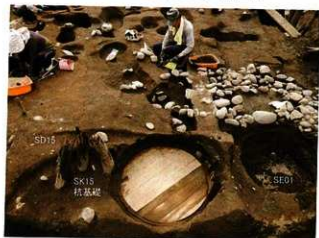
SJ-05 全景 (2面・南)



SJ-06 土層断面 下層はAs-A (3面・南)



SJ-07 全景 (2面・東) 手前はSK-86



SJ-09・SK-116・SK-115 調査状況 (4面・東)



SL-02 粘土・灰検出状況 (1面・南)



SE-01 レンガ出土状況 (1面・南西)



SE-03 全景 (4面・西)



ST-01 全景・人骨検出状況 (2面・北)



遺構確認状況 (2-4面・北西)
 ST-01 (白色貝灰層)
 SK-63(焼土廃棄)
 SK-64(A-A 麻葉土坑)
 SK-66(長方形焼土多量)

ST-01 頭蓋骨 近景 (2面・西)



基本層序トレンチ・SN-01 砂峠 土層断面 (6面以下・西)



試掘2トレンチ 南壁土層断面 (北)



調査区南壁 土層断面 (SK-77・SE-04 周辺・北)



調査区南壁 土層断面 (ST-01 周辺・北)



近代基礎
 ・SD-03
 遺構確認
 作業風景
 (東)

抄 録

フリガナ	レンジャクチョウイセキ
書名	連雀町遺跡
副書名	一多機能型住居整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第372集
編著者名	南田法正
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 TEL.027-265-1804
発行機関	有限会社毛野考古学研究所
発行年月日	西暦2016(平成28)年6月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
連雀町遺跡	群馬県高崎市 連雀町 40-1、 田町 71-1・71-2	10202	633	36°	139°	20150413	360	多機能型住居 整備事業
				19'	0'	~		
				32°	29'	20150727		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
連雀町遺跡	集落跡 (近世城下町)	縄文	掘立柱建物跡	9棟 石器	近世高崎城下町の連雀町・白銀町・通町に該当し、安政期の絵図では調査区の大半分が「大信寺門前」と記載。連雀町と白銀町・田町との境界となる大溝を確認、16世紀後葉～末頃の開削。居住空間→溝→便所遺構・廃棄土坑のある空間へと変遷する。明治24年から昭和52年まで高崎郵便局および電信局・電話局。ダニエル電池・フーラー電池・ルクランシェ電池・電話プラグ・碼子など電信・電話関連遺物出土。
		古墳	柱穴列	1条 埴輪	
	近代遺跡 (郵便電信局)	平安	土坑	123基 須恵器	
		中世	溝	24条 陶器	
	As-B 下水田跡	近世	ピント	150基 磁器	
	洪水層	近世	井戸	7基 土器	
		近代	堀桶	13基以上 拓器	
		現代	不明遺構	2基 瓦質土器	
			近代建物基礎	8基 瓦	
			墓坑	1基 土製品	
		焼土・炉	2基 石製品		
		道路状遺構	1条 木製品		
			漆製品		
			金属製品		
			動物遺体		
			人骨		

高崎市文化財調査報告書第372集

連雀町遺跡

一多機能型住居整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-

平成28年6月6日印刷

平成28年6月15日発行

編集/有限会社毛野考古学研究所

発行/有限会社毛野考古学研究所

前橋市公田町1002番地1

Tel. 027-265-1804

印刷/朝日印刷工業株式会社

